**「」の表記を考える**

（暫定版）

**目次**

1. はじめに　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　p3
2. 「」の表記を考える　　　　　　　 p3
3. 「」は唐音なのか　　　　　　　　　　　 p5
4. 中国語の入声韻尾弱化について　 p9
5. フ入声とはなにか　　 p11
6. 唇内入声字はどのように変化したのか p14
7. 促音について考える p18
8. ふたたび「」の表記を考える p22
9. 声門閉鎖音と促音の似かよりについて考える p27
10. 『日葡辞書』『訓民正音』の入声を考える p29
11. 江戸初期の「ツ」の音を考える p33
12. 江戸初期まで舌内入声はtだったのか p39
13. 上古音再構について思うこと p44
14. おわりに p49
15. 【注】（今回は未校正のため、すべて割愛）
16. 【以前の考察】（前回更新分を載せてあります） p50
17. 【引用書など】 p52
18. はじめに

今回は「は唐音なのか」という疑問について考えます。そしてその考察を進めるなかで、中国語の中古入声（舌内入声）がtであるという通説の是非を考えていきたいと思います。

ところで一か月ほど前から「朝鮮版伊路波」の「ワ」の音注が‘uaではなく‘oa（와）であるのはなぜか、との疑問にも考えがでてきました。しかし前回の更新から早くも1年以上たっていて、このまま書き継ぐことは無理なので、今回は注などすべて省略し、暫定版として更新することにしました。

2021.4.7

ichhan

1. 「」の表記を考える

『日本国語大辞典』が「」を唐宋音よみとしていることには大きな問題があります。そこでまず「脚立」の表記の変遷をみることから考察をはじめることにします。

漢字には呉音・漢音の区別があり、それらの違いは次のようにみられています（沼本　2005：188）。

「日本漢字音には，「呉音」「漢音」「新漢音」「宋音（鎌倉期唐音）」「唐音（江戸期唐音）」という名称によって代表される少なくとも五種類の漢字音が体系的に区別される。例えば「行」に就いて言えば，呉音「ギャウ」，漢音「カウ」，新漢音「ケイ」，宋音「アン」，唐音「ヘン」の如くである。（略）この層的伝承は日本漢字音の大きな特徴である。この日本の五種類の漢字音は，基本的には借用時期の異なりに対応する。即ち，呉音は中国六朝期以前，漢音は唐代中期，新漢音は唐代末期，宋音は宋代，唐音は明・清代の中国語が母胎になったものである。（略）」

そこで「脚立」の「脚」と「立」の単独の読みを次にみてみます（藤堂編　昭和53：1062, 951）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 呉音 | 漢音 | 唐音/慣用音 | 韻母 | 上古音-中古音-中原音韻-北京語（拼音） |
| ■（脚） | カク | キャク | キャ（唐音） | 薬韻 | kɪak→kɪak→kiau→tšiau（jiăo/jué） |
| 立 | リュウ（リフ） | リツ（慣用音） | 緝韻 | lɪəp→lɪəp→liəi→li（lì） |

＊■字は「月」（肉づき）に「卻」の字。「「脚」の異体字」（同書：1068）。以下、■字の代用として「脚」を用います。

＊「脚」：「見母薬韻3等入声kɪak」（藤堂・小林　昭和46：86）。「立」：「来母緝韻3等入声lɪĕp」（同書：101）。

＊反切は『校正宋本廣韻　附索引』（陳等重修　民国80）、また転写ローマ字は『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46）より引用。以下、書名・出版年・該当ページなどは特記するものを除き、省略。

しかし現在の「」の発音は唐音の「キヤ」と慣用音の「リツ」ではなく、「キャタツ」と重箱読みになっています。

このように不思議な読みをする「」ですが、『日本国語大辞典』には次のような記述がみられます（日本大辞典刊行会編　昭和48（第6巻）：67）。

「きゃ-たつ【脚立・脚榻】〘名〙（「脚榻子」の唐宋音よみ）（語釈は省略）　＊尺素往来「凳子（てんす）。脚榻（キャタツ）以下幷卓。机等」　＊史記抄-二・殷本紀第三「脚蹈はとどかず、梯はとり出にも不レ及」　＊日葡辞書「Qiatat（キャタツ）、または、Qiatatçu（キャタツ）。アシツギ（略）　＊浄瑠璃・平家女護島-一「いではからひ申さんと、脚達（キャタツ）をふんでのびあがれば」（以下、現代の「脚立」例は略）」

　上の記述から「脚立」の表記は時代とともにかわってきたことがわかります。

そこで中国語の「脚踏」の語をウェブサイト『百度』でみると、次のような記述がみえます。

「（古代小型家具）

脚踏，今通称“脚蹬子”，古称“脚床”或“踏床”，（以下、略）」

＊https://baike.baidu.com/item/脚踏/9109635。2021.4.2確認。

　また『中国語大辞典』と『中日大辞典』の記述をまとめると、次のようになります。

A.『中国語大辞典　第2巻』（大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成7：1531-3）。一部簡略。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 脚踏（儿・子） | 脚蹬（脚蹬子） | 脚登子 | 脚凳 | 脚鐙 |
| jiăotà（r・zi） | jiăodēng（zi） | jiăodēngzi | jiăodēng | jiăodèng |
| ①踏み台②機足踏み式③方＝‘脚炉’⒔；呉.④足のせ | 機械の足で踏む部分（ペダルの類） | ①足のせ台②踏み台③ペダル | 踏み台 | あぶみ＊「脚鐙子」＝脚登子③ |

　＊「脚塔子」（jiăodāzi）：「〔名〕踏み台.座具の足のせ.」（同書：1532）。

B. 『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：707-8）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 脚撘子 | 脚登儿 | 脚登子 | 脚踏板（儿） | 脚踏儿 | 脚踏子 |
| jiăotà（r・zi） | jiăodēngr | jiăodēng・zi | jiăotàbăn（băr） | jiăotàr | jiăotà・zi |
| ①きゃたつ.足ふみ台.②⇒〔脚踏子〕 | ⇒脚踏子 | ①⇒脚踏子②機械の足を承ける敷き台③足をのせるもの（あぶみ、ペダルなど） | ⇒脚蹬板儿 | ⇒脚踏子 | ＝〔脚踏儿〕〔脚登dēng子①〕〔脚登儿〕〔脚搭子②〕机の下の足のせ |

＊「〔脚蹬板儿〕jiăodēngbăr＝〔踏tà板（儿）④〕〔脚踏板儿〕踏み板.ステップ（機械・車などの）」（同書：707）。

＊「きゃたつ【脚立】梯凳tīdèng）」（杉本・牧田・古屋編　2013：日中辞典の部121）。

＊「じてんしゃ【自転車】自行車zìxíngchē；脚踏車jiăotàchē；单車dānchē」（同書：227）。

＊ローマ字は拼音。

1. 「」は唐音なのか

前節では「キャタツ」に関係する日本語の各時代の表記と現代中国語の表記をみてきました。ところで指小語「子」は「唐代にはこの「子」が指小性を持たぬ「宅子」（『黙記』，（略）などにもつきはじめ」（志村　昭和42：267）ているので、中世の宋・元代には「脚踏」に「子」のついた「脚踏子」が存在したと考えられるでしょう。

そこで「脚立」にたいする、中国語と日本語の関係は概略、次のように考えることができるでしょう。

隋以前　　 唐 　　 宋・元 　　　　　　　　　　 　 現代

中国語：脚蹈-----→脚踏-------→脚踏子---------------------------→脚踏子

（借入）　↓　　　　↓　　　　　↓

日本語：脚蹈 　 脚踏　　　　 脚榻子? 　　脚榻　　　 脚達　　　　脚立

 カクダウ　キヤクタフ　 キヤ・タツ　 キヤタツ　 キヤタツ　　キャタツ

 kɪakdəu　　kɪakthəp　 kɪatatsiei　*Qiatatçu*　 *Qiatatçu*　　*kyatatsu*

呉音 　 漢音　　　　宋音 　　唐音　　　 江戸中期　　現在

＊宋音の「脚榻子」にはこれから考えるように疑問があり、疑問符をつけてあります。

＊「脚」（見母薬韻kɪak）：「カクキャク」（藤堂編　昭和53：1062）。「蹈」：「ドウ（ダウ）；dəu」（同書：1282）。「踏」：「トウ（タフ）；t’əp」（同書：1280）。今は藤堂氏の仮名をローマ字化し、kɪakdəu/kɪakthəp/kɪatətsieiとしてあります（入声弱化については次節）。

＊*Qiatat/Qiatatçu/kyatatsu*：『日葡辞書』に「Qiatat. l,Qiatatçu.　キャタ**ッ**.または，キャタツ（脚榻）　Axitsugui.（足継）（略）」（土井・森田・長南編訳　1980:492）とあるので、いまかりに（江戸期）唐音としてあります。*kyatatsu*はヘボン式ローマ字。

＊「子」：「精母止韻上声tsiei」。「近代[ɿ]」（佐藤　2002：80）。kɪakthəp→kɪatatsɿ（kɪatatsiei）のə→aの変化については、のちの更新で。

しかし上の変化には疑問がわきます。現代中国語の辞典に「脚踏子」はみられますが、『日葡辞書』には「脚榻子」はみられません。そこで宋代の中国語には「脚榻子」が存在しなかったと考えれば、宋音「脚榻子」を日本に持ち帰ることはもちろんできないでしょう。では禅僧が中国から持ち帰ったといわれる宋音は「脚榻子」ではなく、「脚榻」だったのでしょうか。大いに疑問となります。

有坂氏は『日葡辞書』に「脚榻」と記載されていることから、次のような考えをだされています（有坂　昭和32：565-6）。

「（上略）室町時代の辭書類に見える唐音語の中で「子」の字は椅子（イス）帽子（モウス）拂子（ホツス）段子（ドンス）桶子（ツス）などのやうに一般にはスと讀まれてゐるのであるが、唯二つの例外がある。即ち、楪子（チヤツ）と脚踏子（キヤタツ）とがこれである。前者は、橋本先生が吉野時代又は室町初期の撰と論定しておいでになる頓要集の中に存するものであり、後者は文安元年（一四四四）の序のある下學集に既に見えるものである。慶長八年（一六〇三）出版の日葡辭典を譯したLéon Pagésの日佛辭典（一八六八）には、前者をTchatsouと記し、後者をKiatat,ou kiatatsouと記してゐる。一体「子」の支那原音はtsɿなのであるから、日本語のツがtsuの音を持つてゐる時代ならば、「子」の支那音は當然ツで模倣せらるべき筈である。故に、江戸時代に借入された毯子の如きはダンの音になつてゐる。然るに椅子（イス）帽子（モウス）等の如く、古人がかつて之をスの形で傳へたといふことは、即ちその當時日本語のツが未だtuに近い狀態に在つたことを示すものでなければならない。併し、さらば楪子（チヤツ）脚踏子（キヤタツ）の借入された時代には日本語のツは既にtsuになつてゐたものと考へなければならないか、といふと、必ずしもさうではない。何故なら、ツが未だtuの状態に在つた時代には、日本人の耳には、支那音節tsɿは、言はばス（su）とツ（tu）との中間音のやうに聞えた筈であるから、それはスで模倣されることもあつたらうが、時にはツで模倣されることが無かつたとも斷言は出來ないわけである。殊に、楪子や脚踏子の場合には、「楪」や「踏」が入聲（恐らくは韻尾に聲門閉鎖音を有するもの）である關係から、その直後に續くtsɿ（子）のtが常よりもいくらか硬く響いたといふ風なことは、有り得ないことではない（音聲學協會會報41号，本書607頁参照）。」

＊この有坂氏の考えをAとします。

このように有坂氏は考えられたのですが、上の考えには納得されなかったとみえ、後記のなかで次のように注されています（有坂　昭和32：683-4）。

「（上略）ただ、ここに注意すべき點がある。即ち、チヤツは、なるほど下學集・節用集・撮壤集・運歩色葉集などには楪子と書いてあるけれども、更に古い頓要集では楪の一字をチヤツと讀んでゐるし、なほ溫故知新書も同樣である。又、キヤタツは、支那では脚踏子とも言ふけれど、我が國では、古來脚踏又は脚榻（榻は踏と同じ）とのみ書いてゐて、「子」の字は着けない。然らば、チヤツやキヤタツのツは、「子」の音ではなくて、寧ろ、「楪」や「踏」（「榻」）の原音の入聲短促の勢を表し、或は、原音の韻尾に存在したと思はれる聲門閉鎖の音を寫したものであるかも知れない。我が國の禪林では、儈の持つ鉢を楪と言ひ、此の場合には楪をテツと讀む。禪宗語にはなほアン（合行）アン（行益）のやうな例もある。チヤツやキヤタツのツも、或はこれらと同じ類に屬するものではなからうか。この考は、一つの試案として提出しておく。（略）なほ、楪子は壒襄集や禪林象器箋ではチヤ（ツ）スと讀まれてゐる。もしチャツが「楪」一字の音であるとすれば、この方が本當の（「子」の着いた）「楪子」の唐音であるかもしれない。」注8

＊この有坂氏の考えをB とします。

＊「楪」：『広集韻譜』には「**定**　**徒協**　牒（略）蝶（略）■達協切（略）」（■字は木偏に牒；顔編　2005：261）とあり、「楪」は「」（定母怗韻diep）と同音か。「蝶」は現在「ちょう」。

そこで有坂氏の先の考え（A）と上の考え（B）を比較すると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 有坂氏の考え（Ａ） | 有坂氏の考え（Ｂ） |
| 当時の音 | 1.「子」はtsɿ。当時のツはtuだったため2.「踏・楪」（唇内入声）の韻尾が[ʔ]だった | 1.鎌倉時代のスは江戸時代にはツ2.「～子」は短促の勢/[ʔ]（下注） |
| 脚踏（脚榻） | キヤタ・ツ（脚踏・子） | キヤ・タツ（脚・踏） |
| 楪子 | チヤ・ツ（楪・子） | チヤツ・ス（楪・子）/チヤツ（楪） |
| 唐音 | 脚踏子/楪子 | 脚踏/楪 |

＊下注：「或は、原音の韻尾に存在したと思はれる聲門閉鎖の音（筆者注：[ʔ]）を寫したものであるかも知れない。」（有坂　昭和32：684）。

上の比較からＡとＢの考えの主な違いは「キヤタツ」「チヤツ」の語尾のツを接尾辞の「子」とみるか、それとも「脚踏」「楪」の韻尾に声門閉鎖音（/ʔ/）を考えるかであるといえるでしょう。

そこで上のＡとＢの考えのどちらが正しいかを考えるために、室町・江戸時代の「キヤタツ」「チヤツ」関係の表記をみてみると、次のようになっています（下記のかたかなの・印（中黒）は筆者補）。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | A | B | C | D | E | F | G |
| 書名 | 下学集 | 塵添壒嚢鈔 | 撮壤集 | 温故知新書 | 運歩色葉集 | 書言字考 | 禪林象器箋 |
| 刊行年 | 1444年 | 1532年成 | 1454年序 | 1484年  | 1548年序 | 1698年成 | 1741年 |
| 脚蹈 | 脚蹈 | 項目なし | 脚蹈 | 脚榻 | 脚蹈 | 脚榻 | 脚踏 |
| かな | －ヤ・タツ/キヤ・タツ/シヂ | 表記なし | キヤ・タツ | キヤ・タツ | キヤ・タツ | キヤ・タツ |
| 引用書 引用頁 | 東大國語研究室編　昭和63：82,235,391 | 浜田・佐竹　昭和46：－ | 中田・根上　昭和46： | 中田・小林昭和48：334右1 | 道忠編明治42：812 |
| 62左3 | 391右1 | 278右8 |
| 楪 | 楪子 | 楪子 | 楪子 | 楪 | 楪子 | 楪子 | 楪子 |
| かな | チヤツ・ス/チヤ・ツ/チヤ・ツ | チヤス/チヤツ/チヤツ | チヤウ・＊ | チヤツ（楪） | チヤ・ツ | チヤ・ツ | チヤツ・ス |
| 引用頁 | 79,231,389 | 218上,218上,218上 | 63左3 | 431右1 | 154左1 | 308左8 | 827 |

A：『下學集三種』（東麓破衲序）：天文23年本・永禄2年本・黒川本の「巻之下　器財門」にみえる「脚蹈」。「シヂ」の漢字は「脚蹈」ではなく「」。

＊「付録1　唐音一覧（呉音・漢音対照）」（藤原　昭和63：335上, 337下,337下）には、『伊京集』（古本節用集の一種で、室町末期の筆写）/『明応五年本節用集』（1496年）/『天正十八年本節用集』（1590年）/『饅頭屋本節用集』（1596～1615頃刊）/『黒本本節用集』（室町末期書写）/『易林本節用集』（1597年刊行）のすべてで、「（）・」。

B：『』：「天文元年（一五三二）、僧某が『壒嚢鈔』（筆者注：1445-6年刊）に『塵袋』から抜粋した二〇一箇条を添え、あわせて七三七条を二〇卷としたもの。」（浜田・佐竹編　昭和46：14）。『塵添壒嚢鈔』の「ツス。チヤツナントヽ云字ハ何ソ（以下、略）」（同書：565）の記述はもとの『』（7巻4段）の記述に同じ。

C：『撮壤集』（飯尾永祥著）の「チヤツ・＊」：「楪子」の項目には「」のみ仮名があり、「子」には仮名がなく、上のように表示。その索引篇には「チヤウママ撮壤一一六3→テフツ」「テフツ〔楪子〕→チヤツ」（中田・根上　昭和46（索引篇）：250,269）。

D：温故知新書：新羅社宮司大伴泰広（大伴広公）1484年成。

E：運歩色葉集：著者不明、1548年。

F：『書言字考節用集』（槙島昭武著）：「享保二年（筆者注：1717年）版などの題簽には「増補合類大節用集」、（略）」（中田・小林　昭和48：10）とあるが、「合類大節用集」（1680年刊）とは別書。

G：『禅林象器箋』（臨済宗の僧、無著道忠著）：道忠編　明治42：812,827（国会図書館デジタルコレクションinfo:ndljp/pid/823268）より。

＊『頓要集』（建仁寺の僧か、1444年成）：「」（中田・根上　昭和46（影印篇）：506）。

＊『』（室町時代後期、一条兼良編）と『饅頭屋本節用集』（16世紀末刊？）には「」、また『』（南北朝時代）には「」（山田　昭和33：170,171,170）。

さて上に引用した諸文献からわかるように「脚榻」の表記はみられても「脚榻子」はみられません。そこで鎌倉時代、禅僧が日本に持ち帰った宋音は「脚榻子」ではなく「脚榻」だったと考えられてくるでしょう。しかし「脚榻子」を現代の学者が考えだした幽霊語であると考えても（ここでは「脚踏」と「脚榻」のちがいは不問にして：第8節参照）、「脚榻」の「榻」（透母盍韻thap：タフ）がタツと読まれたのはなぜか、また江戸時代の「」が再び「」（「」は定母曷韻入声dat）の表記に変わったのはなぜかという、新しい疑問がわいてくるでしょう。

1. 中国語の入声韻尾弱化について

ここからは唇内入声字の「榻」「トウ（タフ）」（藤堂編　昭和53：665）が舌内入声字（例：「」）と同じようにその語尾が「ツ」で表記されるようになったのはなぜかという問題を考えることにします。

「全て密教に伴って請来された儀軌の中の声明としての直読資料のみ」（沼本　2005：196）にみられる新漢音には、次のような特徴がみられます（同書：196-7）。

「1　鼻子音の消失がより進行する。「明ベイ」「命ベイ」「愍ビン」「寧デイ」

2　喉内撥音尾の口蓋化がより進行し，脱落した形が有る。「證シ」「乗シ」「勝シ」

3.入声韻尾の消滅過程を反映した形が有る。「積シイ」「十シ」「白ハイ」

＊「積」：昔韻iek。「十」：緝韻ɪĕp。「白」：陌韻2等ɛk。

＊「極」（群母職韻ɪə̆k）。ə̆はəの上部に̆の記号（合字）の代用。「ゴク・キョク」（藤堂編　昭和53：659）。

＊「薩」（心母曷韻sat）。「サチ・サツ」（同書：1137）。

＊新漢音では「「極樂」‘キラク’」「「菩薩」‘ホサ’」（藤堂　1980：172,173）。

また上の第3項の特徴である入声韻尾消失については次のような考えがあります（藤堂　1980：173）。

「また極キ・薩サのように，入声韻尾のきえた形を反映しているのもおもしろい。北宋の時代に, 入声韻尾の/-p/, /-t/, /-k/」などが区別されなくなって, みな一様に/-・/（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）という促音になった。新漢音の読み方は，おそらくこのような状態を反映するものであろう。」

上の入声韻尾消失にたいする羅常培氏の考えを、有坂氏は次のように紹介しておられます（有坂　昭和32：601－2）。

「（上略）まづ、上古音p,t,kは、廣州・客家・汕頭・厦門等の方言ではそのまま保存せられ、呉方言では聲門閉鎖音に變じてゐる。然るに、或る方言では、中古に於てこのp,t,kがb,d,gに變じ、更にβ,δ（r）,~~ɡ~~と弱まり、つひには全く消失するに至つた。官話や西北方言は即ち後者に屬するものである（「唐五代西北方音」68頁）と。この考に據ると、北京官話の如きは、未だかつて聲門閉鎖音の状態を經過したことが無いといふことになる。従つて、前の滿田博士のお説とは相容れないのである。」

＊δ：英語のthisのthの発音記号の代用。

＊『唐五代西北方音』（國立中央研究院歴史語言研究所　單刊甲種之十二）　羅常培著　民国22年（上海）　＊影印本は（株）大安（東京）　1963年発行。

＊『現代呉語的研究』　趙元任著　大華印書館　民国57年発行。

そこで中国語北方方言の入声の変化にたいして諸説あるなか、橋本氏は次のような考えがあると紹介されています（橋本萬太郎　1981：327）。

CVp┓

CVt┻━CVt━┓

CVk ＞ CVk━┻CVʔ＞CV」

＊南方方言はp,t,k→p,t,k（変化なし）。

＊また「周氏が「皇極經世圖聲音圖解」の章において推定したごとく、邵雍（筆者注：1011～1077）のころ即ち北宋初期において-t,k-ママの韻尾子音はもはや失われて、聲門閉鎖音ʔとなっていたと考える外あるまい。つまり三内（筆者注：唇内p・舌内t・喉内k）の韻尾の中で-pの子音のみがなお獨立して存在していたのである。」（小川　昭和52：135）。

そこで宋時代の（江南の）官話系方言入声は韻尾が弱化し声門閉鎖音（[ʔ]）になっていて、渡海した禅僧たちはその音を聞き覚え持ち帰ってきたと考えることができるでしょう。そして中国から帰った禅僧たちは中国で聞き覚えた声門閉鎖音（/ʔ/）が当時の日本語の促音ツ（＝Q）に似ていたためと考えれば（第8節：濱田氏の考え）、その声門閉鎖音をツで表記したと考えることができるでしょう。

この考えをわかりやすくあらわせば、次のようになります。

隋唐　　　宋　　　　　 　 現在

中国語北方方言の唇内入声韻尾：p-------→ʔ-------------→φ（消失）

 　　　　　　　　↓　　　　↓（弱化した声門閉鎖音を禅僧が持ち帰る）

日本語の唇内入声語尾　　　　：↓　　　 ツ（促音Q）--→ツ（Q）

　　　　　　　　　　　　　　　　フ----------------------→ウなど（この変化は次節）

 　　　　　　　　　　　　上代　　　鎌倉時代　　 　現在

1. フ入声とはなにか

前節では「榻」（透母盍韻thap）が「タツ」と読まれた理由をその当時の中国語入声が弱化した声門閉鎖音（/ʔ/）になっていて、禅僧が持ち帰ったその声門閉鎖音が当時の日本語の促音ツ（/Q/）に似ていたためと考えました。では、中国語の声門閉鎖音はなぜ促音ツに同認されたのでしょうか。

そこで唇内入声字のかな表記の変化を考えるために、次に『』（元禄版）の声点図をみてみます（上野編　平成28：62）。

上聲　 毘富羅　　去聲

〇　　〇　　〇

平聲輕〇 **國**〇入聲輕

　 　 〇　　〇 　〇

平聲　 　入聲フ　入聲ツクチキ

＊図中の‘上聲’などの縦書き文字は横書きに改めました。

ところで『法華経音弁訛』（沙門覚順撰1844年刊）には「法」字について、次のような記述がみられます（小松　1956：70）。

「　法華ト二字ノトキハホッケ〇法華経ト三字ノトキハホケキョウ〇妙法ノトキハメウホウ也、法字ニ三音ヨム」

＊「法」：帮母乏韻3等（pïɔp→）fïɔp。「ホウ（ホフ）・ホウ（ハフ）」（藤堂編　昭和53：724）。

＊新漢音の例：「入平佛入平法入佛入（阿彌陀經）」（飯田　1990：91；入声点の黒丸は入/平で代用）。

このように「」のときは促音に、「」のときは入声語尾が消失して、また「」の時は入声語尾フがウに変化して読まれたことがわかります。ます。

そこで沼本氏は「」の読みと先の『補忘記』にみられる入声フとを関係づける、次のような考えをだされました（沼本　1974：1）。

「鎌倉時代（筆者注：1185－1333年）初期書写と思われる「九条家本法華経音」は、その内容から察せられる如く、法華経呉音直読の為に編述されたものと考えられる。この音義の巻末部（覆製本二十一丁表～同裏）に、声点図の掲げられている事はよく知られた所である。その声点図の平声重と入声重との中間に加える声点として、

本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業

の如き書入れが有る。この声点が、後世「フ入声」或いは「不入声」と呼ばれるものと同一のものを指している事は疑い得ない。」

＊上の平声重・入声重・「中間に加える声点」はそれぞれ先の『補忘記』の声点図の平　聲・入聲ツクチキ・入聲フにあたる。

また上の「九条家本法華経音」と同時代の親鸞の『草稿本教行信証』（1224年成）にもウに変化した「フ入声」がみられ、それにたいして小林氏は次のように述べられています（小林　昭和44：59）。

「《不入声》　唇内入声音を「－フ」でなく「ウ」で表記することは、和語におけるハ行転呼音と関係するが、それだけでなくこの入声音が、韻尾に[u]を加えた開音節化したものであつたことを考えさせる。草稿本教行信証では、

　　〇〇師（巻五）　ママ〇塔タウ寺（巻五）

と葉韻の「猟」、盍韻の「塔」を「レウ」「タウ」と「ウ」で表記し、しかもこの入声字に、平声点が差されている。これは入声音が本来の漢字音を失い、[u]を加えた音になった結果、効摂平声所属の[u]に由来する（筆者注：豪韻auなどの）字音と区別がつかなくなつた反映である。九条家本法華経音に「本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業」とあるのは、この現象が院政期から存したことを示している。（以下、省略）」

＊「」：来母葉韻入声3等lɪɛp。

＊「塔」：透母盍韻入声1等thap。「〇塔」は上声点。：「二十八　盍（略）〇榻牀也吐盍切十九（略）塔浮図（以下、略）」（陳等重修　　民国80：537）。

このように日本ではその中国語の唇内入声字の語尾のかな表記が鎌倉時代ころにはフからウに変わっていることがわかります。

そこでこの唇内入声字の表記について、小松氏は次のように考えられました（小松　1956：67）。

「**概要**（改行）中国の中古音において、韻尾に-Pを持っていた唇内入声韻所属の諸字は、最初フのかなを以って転写されたが、以後、第二音節以下に「フ」を持つ国語の語彙と同様の音韻変化の結果、韻尾が長音化して、本来の無尾韻や-ŋ韻尾を持つ諸字と区別を失うに至った。しかしこの一般的傾向に反して、一部には、立・雑・接・摂・執・湿・蟄颯注24などのように、舌内入声音と同一の「ツ」韻尾に変化してしまった文字がある。（筆者補：濱田氏による）この現象に対する説明としては、中国本土における入声韻尾の崩壊過程と関係づけてなされた（下線は筆者）ものがあるが、ここには、伝統的性格の特に強いと思われる博士家訓点資料にあらわれた読書音において、この種の特殊な変化をした文字が、

a、一字の漢語として、サ変動詞の語幹になる場合が極めて多いこと。（接・接ママ・揖等）

b、使用の範囲が、無声子音に続く場合に殆んど限定されていること。（颯等）

によって、中世初期から

-Φu-＞-Φụ-＞（-Φ-）＞-q-

の過程で促音化をおこし、舌内入声韻尾と促音とがたまたま同じ「ツ」表記をとることから、舌内入声と誤認されて-tの韻尾を持つに至った過程を明らかにして、この変化が、新来の宋音とは一応無関係に起こった、国語自体の音韻変化であることを立証し、あわせて、日本字音における異例の考察に当っては、音韻法則を優先させる前に各字の語性上の差異についての十分な考慮が払われなければならぬことを強調しようとする。」

＊ụ：uの無声化音（u の下部に小丸点（○）の代用）。

＊「立・執・湿・蟄」：緝韻ɪĕp。「雑・颯」：合韻əp。「接」：葉韻4等iɛp。「摂」：葉韻3等ɪɛp。

＊前節の表に示した、弱化した声門閉鎖音をツで表記したとする濱田氏の考え（上引下線）については第8節。

そして唇内入声pがツ表記されるようになったことにたいして、小松氏は次のような変化を考えられました（小松　1956:75）。

（1）-p……-＞-Φu-＞-Φụ（-Φ-）＞-q-

（2）-p……-q-―――――――――――――--q-

↘↘

-t――――――――――――――-t＞-tɯ＞-cɯ

　　　　　　　∖

　　　　　　　　-q-――――――――――――--q-

＊（1）のp＞Φuにハ行転呼音の変化を想定することにたいしては沼本氏の批判（次節）があります。

＊（2）の-p/-tの2行は「﹛」でくくられています。

そこで唇内入声字の表記にたいする小松氏の考えを筆者の理解によって図式化すると、次のようになります。

隋・唐代　　　　　　　　　　　　宋代　　　　 　　 現代

中国語の入声　　 ：t（舌内）/p（唇内）--------------→ʔ---------------→φ（消失）

↓入声t/pを借入

舌内入声の促音化：t---→ツ（促音Q）--------------→ツ（Q）---------→ッ（Q）

唇内入声の変化　：p→Φu（フ入声）┬→u（のち長音化）

└Φụ（無声化）→Q（促音ツに誤認）→Q（ッ）

奈良時代　　平安時代　　　　　鎌倉時代　　　　　 現代

＊中国語の入声は宋時代には声門閉鎖音（/ʔ/）に変化していたと考えてあります。

そこで上の変化が正しいとするなら、平安時代終わりころから院政時代あたりのごく短い期間に、Φuが無声化し、さらに舌内入声のQに誤認されるという離れ業の変化がおこったことになります。しかし言語は緩慢に、そして確実に変化するという常識的な（つまり言語学的な）考えからすれば、とてもそのような変化を考えることはできないでしょう。このように考えてくると、小松氏の唇内入声（入声フ）が舌内入声ツに誤認されたという考え（上の図式の変化）には疑問がわいてくるでしょう。

1. 唇内入声字はどのように変化したのか

前節ではフ入声が舌内入声ツに誤認され、ツ表記されたという小松氏の考えにたいして否定的な考えをだしておきました。そこで筆者と同じように小松氏の考え（以下、誤認説とよびます）を批判された沼本氏の考えを、これからみていくことにします。

まず真言声明家の故大山氏（1895－1992）の唇内入声にたいする考えを沼本氏は次のように紹介されています（沼本　1974：1）。

「例えば、「〇妙法」（筆者注：平声と入声。「法」の下線は入声の声点（「法」字の下部中央に〇印）の代用）の「法」にしてもしこれを「法〇身〇」（筆者注：入声と去声）と綴るならば「法」は当然入声となりツメル声となる。けれど「妙法」と書いたとき「法身」と「法」と同じ音で読むを得ない。このときの「法」は入声の「法」に対して「不入声」の「法」という。総じて入声は二字仮名において下の文字がフツクチキという仮名字の中の何れかである場合に限る。上の一・崛の如き福・目の如き皆ツチク等の音を下に有するので入声となる。その中「法」はハフの仮名に読む。即ち下にフの音を有するときこれを不（フ）入声という。換言すれば入声でない入声という意である。この入声と不入声とは漢・呉音に通ずる。（以下、略）」

　＊上の引用文は原著（大山　昭和53：367）から再引用してあります。

＊「一」「崛」：質韻4等iĕt/物韻3等ïuət。「福・目」：屋韻3等ɪuk。「法」：乏韻3等ïɔp。

上の大山氏の記述を沼本氏は次のように解釈されました（沼本　1974：2）。

「（略）即ち「法身」を入声であるとし、これに対立するものとして妙法の場合を不入声と呼ぶ、と言うのである。そして、入声はツメて読み、不入声は「ハフ」の仮名に読む、との説明が有る。（略）伝統的な声明の用語としての「ツメル」は、所謂促音を示すと考え得るから、結局入声とは促音で読む場合を言っておられる、と解釈すべきであろう。この氏の解釈は、具体的な読誦を踏まえての立言であって、看過出来ない。」

そしてフ入声についての小松氏の考えと声明家である大山氏の考えの違いを沼本氏は次のように述べられています（同書：2-3）。

「（上略）小松英雄氏は、唇内入声字が、の例の中に挙げられていない事を積極的に評価され、平安末期までには全て平声に転じてしまっていた（筆者注：前節で紹介した「九条家本法華経音」にみえる「本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業」）――そして、「平声に転じる」という事を、韻尾が＝ウとなっていた――と解釈された。然しながら、大山氏の考え方に従うならば、当然「法身」の「法」等の場合には、入声重の例として挙って来る事になるはずである。」

また法華経読誦資料（⒜：大東急記念文庫蔵法華経巻八（24-120-892））を分析された沼本氏はフ入声と入声の違いを次のようにみられました（同書：8）。

「＜唇内入声字が熟語の下位に立って読まれる場合には常にフ入声が加えられる＞＜唇内入声字が熟語の上位に立って読まれる場合には常にフ入声と入声との両方が加えられる。その際、フ入声が加えられるのは下接字が有声子音の場合であり、入声音が加えられるのは下接字が無声子音の場合である。」

＊上位字の例は「」「」、下位字は「」。ただし、中世には、「　色葉字類抄には「獨立」「混雜」はそれぞれ「トクリフ」、「コンサフ」と註してゐるが「確執」は「カクシツ」「クワクシウ」兩樣の註がみえてゐる。」（濱田　1950a:113）。

さて大山氏が述べられた本来の入声とフ入声（入声でない入声）の違いから、沼本氏は唇内入声について、次のように考えられました（沼本　1974：12）。

「（略）法華経の伝統的な読誦に於ける唇内入声字には、

ツム―ツ表記―入声

ヒク―フ表記―フ入声（入声の格外）

の如き関係が成立していたのである。この「ツム」が促音を示している事は「ツ」で表記してある事に依って明らかであろう。そしてそれを「入声」として把握しているのである。これに対して、「ヒク」音である「フ入声」は全て「フ」で表記されているので、音価も「-ΦU」と考えられそうであるが、そう考えると、音義中の「引テ長声ニ読ム」（下線は筆者）という記述、亦当時のキリシタン資料の記述の示す実態に合致しないので、既に「-U」となっていたと考えてよい。

従って、右（筆者注：上）の両音義の記述から、

入声―促音/-Q/

フ入声――/-u/

という音価が導き出されるのである。

江戸時代の日遠・日相の両音義から導き出される右（筆者注：上）の結論が、そのまま鎌倉時代の具体的な法華経読誦呉音にも適用し得る事は、両者に共通して見出される文字面の入声・フ入声と、促音（仮名）表記・非促音表記との用例がしている事に依って疑う余地はない。但し鎌倉時代のフ入声の示す音価が、〔-U〕であったかどうかについては即断出来ない。尤も先に例示した様に、南北朝期加点と思われる仮名は全て「―ウ」と表記されているので、この当時には〔-U〕に変化していた事は確かであるが、それとて、全ての場合に敷衍していいものかどうか、尚問題がある。（略）」

＊下線の「引テ長声ニ読ム」：日遠の『法華経随音句』（1643刊）を補闕した日相（1635～1718）の『法華経音義補闕』に、「（略）談等・是レ入声ノ格外ナリ。一字にツムルトヒクトノ二声アルハ、フツ入声ノ字なり（94）」（上書：12）。

ここまで沼本氏の論文（沼本　1974：1－22）から筆者の考察に必要となる部分のみを簡単に紹介しました。

ここで入声に対立するフ入声が特立された事情についての沼本氏の考えを次に紹介しておきます（上書：18）。

「＜フ入声の特立は、（法華経）呉音読誦の際生じた唇内入声の促音化を、唇内入声＝フ・舌内入声＝ツチ・喉内入声＝クキという体系的把握を崩さずに、処理する為に発明されたものであって、ハ行転呼音とは無関係である＞

奈良　　　　　　　　　　院政初期頃

-*Φ*U（フ入声特立）＞-U

　　　　　　　　∕

-P＞（-Φ-PU）＞-*Φ*U

∖

-Q………………-Q （入声とす）」

ここで上の沼本氏の考え（同書：15）を筆者の理解によってまとめると、次のようになります。

 　古代　　　　　院政時代前後　　　　　　　　　　現代

ツ表記：p--------┬-→Q（入声:舌内入声tと同認）----→Q（ツ）

ウ表記：　　　　 └-→Φu（フ入声の特立）-----------→u（ウ）

＊小松氏の考えは前節の図表（小松　1956：75）。

ところで沼本氏は法華経読誦の「呉音直読資料に於ける唇内入声字の入声点（筆者注：本来の入声である入声重）は、促音化を反映している」（沼本　1974：11）とみられました。また『日葡辞書』には「」「」（「Nattocu/cattô」；土井・森田・長南編訳　1980：453,110）がみられることから、「納」（合韻əp）と「葛」（曷韻at）はともに促音ツ（Q）で発音されたとみられます。さらにこの促音ツは同時代の日遠・日相の両音義にもみられることから、沼本氏は唇内入声（重）と促音ツ（Q）の関係は自明であり、「疑う余地はない」（前引）と考えられました。しかし、この沼本氏の「疑う余地はない」との言明には大きな問題があります。なぜなら沼本氏は院政～鎌倉時代の入声と現在の入声が同じであったと暗黙に認められているからです。もし鎌倉時代の入声と大山氏が伝承された入声（ツメルの音）が同じでなかったとすれば、あるいは鎌倉時代の入声と江戸時代の入声が同じであったとして、その江戸時代の入声が現在の促音と同じでなかったとすれば、鎌倉時代の舌内入声に同認された唇内入声と現在の促音が同じであったとはいえないでしょう。そこで鎌倉時代の唇内入声のツ（通説はQ）が現在のツ（促音Q）であると結論づける沼本氏の考えには「疑う余地は大いにある」としなければならないでしょう。

1. 促音について考える

前節ではフ入声ではない、本来の唇内入声（入声重）を現在の促音ツ（Q）とみることに「疑う余地はない」とされた、沼本氏の考えに疑義をだしておきました。

ところで日本語で促音となるのは唇内入声だけではなく、舌内・喉内入声もあり、そこには次のような違いがみられます（濱田　昭和58：82）。

「（四）現代語において、入声音に清音節が接して一音韻論的単位となる場合、舌内のものは原則として促音の形で現われるが、唇内、喉内のものは必ずしもそうでないこと（「、、、」など、これに対して「、」）などが挙げられる（原注4）。従ってこれ等の資料によって、当時「つ」で表わされた入声韻尾が[t]であったという事実に対しては殆んど疑いを挿む余地はないかに見える。（略）」

そこで唇内・舌内・喉内入声の違いをみると次のようになっています（同書：82）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 唇内入声p | 舌内入声t | 喉内入声k |
| 母音化 | 法科(ホフカ：フ入声）→ホウカ→ホーカ（長音化） | 仏（ブチ：呉音）仏（ブツ：漢音） | 学派（ガクハ）識別（シキベツ：曽・梗摂のみ） |
| 促音化 | 法華（ホッケ）＊語彙的（接近：セッキン） | 仏陀（ブッダ）＊連声（雪隠：セッチン） | 学校（ガッコウ：カ行音が下接）＊「六反」（ロッペン） |

＊「法」：乏韻3等ïɔp。「仏」：物韻3等ïuət。「一」：質韻4等iĕt。「葛」：曷韻at。「学」：覚韻3等ɔk。「識」：職韻3等ɪə˘k（ə˘はəと˘の合字）。「六」：屋韻3等ɪuk。

ところで喉内入声字のツ表記（促音化）については日遠の弟子である日相（日蓮宗の僧1635～1718年）の音義に、次のような記述がみえます（沼本　1974：13）。

「（上略）夫レ他音属自ノ連声ト者下ノ自カ音ニサソハレテ上ノ他ノ音ヲ転スル也郁ウツウク-モツモク-枳釈シャシャク-ネツ六ロツロク各カツカク-等是也郁枳目枳モ仮名ツクル時ハウクキモクキナレトモ（筆者注：トモは合字）ヨム時ハ下ノ字ノ自カ音ニサソハレテ上ノ他字ヲ変メウツキモツキトヨム也（下略）」

上の記述から、沼本氏は喉内入声と唇内入声との違いを次のように考えられました（同書：13）。

「（略）重要な点は、「」の例を除いて、いずれもカ行子音に続く場合の促音化例である事（略）、この促音化を「連声」と把握している事、である。（中略）喉内入声字の促音化を、その様な「連声」として把握した事は、結局喉内入声字の促音化が、単なる孤立的な音声現象にすぎないものと把握されていた事を物語るものであろう。（略）唇内入声字の場合につき「一字ニツムルトヒクトノ二声アルハ、フツ入声ノ字ナリ」との記述（筆者注：先に引用した日相の『法華経音義補闕』にあり）が有る様に、促音化をの範疇で把握していたのとは、大きな相違が有ったわけである。」

さて上のように唇内・舌内・喉内入声字の変化には違いがみられますが、その変化は次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 入声 |  | 古代　　院政初期　鎌倉時代　　　　　　　　　江戸極初期　 現代 |
| 舌内t | 促音化 | set---→seQ-------------------------------→seQ---------→seQ（せっ） |
| 母音化 | セツ（雪）セツ　　　　　　　　　　　　　　　セツ　　　　　セツ |

　＊喉内入声kは舌内入声tに誤認

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 喉内k | 促音化 | ɦɔk-------→gaQ（がつ：連声）-------------→kaQ（かつ）→kaQ（かっ） |
| 母音化 | カク（各）　　　　 カチ/カク（各）　　　 　　　　カク（各）  |

＊唇内入声kは舌内入声tに誤認

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 唇内p | 促音化 | kap-------→kaQ（かつ）--------------------→kaQ（かつ）→kaQ（かっ） |
| 母音化 | カフ（甲）　カウ（フ入声）　　　　　　　　　カウ　　　　　コー |

＊促音化はローマ字（ひらかな）で、母音化はカタカナで示してあります。

＊小松氏の誤認説によって上の変化を考えてあります。

＊「雪」：薜韻4等iuɛt（「」）。「六」：屋韻3等ɪuk（「」）。「学」：匣母覚韻2等ɦɔk（「」）。「各」：鐸韻1等ak。東大国語研究室蔵大般若経建長六年校本には「」（沼本　1974:21）。「甲」：狎韻2等ăp（「/」）。

ここまで唇内・舌内・喉内入声の促音化の違いについてみてきましたが、そこで江戸中期の『音曲玉淵集』（三浦著1727年）の記述を次にみてみます（岩淵　昭和52：209）。

「（上略）この書では、入声ツに対しては

惣してツの音の字は一字にても二字にてもつめて唱へ或はのみてうつり又はちト唱へ替とかく直には唱へず（巻一）

と、大体において入声ツは文字通りに発音する事はなく、チと発音するか又はツメルかノムかであると述べている。（以下、略）」

＊原著（三浦　昭和50：42）では、「一　歌書并呉音ハツの音ヲちト唱ふ定格也（改行）　　　　（略）　」のあとに、上引の「惣してツ～」に続く。

また江戸極初期のロドリゲスの『日本大文典』（1604－8年刊）には次のような記述がみられます（土井訳注　昭和30：637）。

「（上略）例へば，Taixetta（タイシェッタ），Xixetta（シシェッタ），Connitta（コンニッタ）はTaixetua（大切は），Xixetua（師説は），Connichiua（今日は）である。尤もこの二つの方法は，両方とも発音され得る。」

上の各語の変化は～t（入声）＋pa（助詞ハ）→～ttaの変化と考えることができるでしょう。そこで「雪隠」の「雪」（心母薜韻4等siuɛt）の入声韻尾をtと考えれば、「Xet」（「雪」）＋「In」（「隠」：影母隠韻3等ʔïən）→「Xecchin/Xetchin」（それぞれ土井・森田・長南編訳　1980：－,334,743,756）の変化を考えることができ、連声「」をうまく説明できるでしょう。

　ところで室町時代初期の世阿弥自筆の伝書である『花習内抜書』（1418年）には次のように小書きされた「ッ」がみられます（岩淵　昭和52：60）。

「ホンゼ***ッ***タヽシクテ（本説正しくて）

ケ***ッ***ク（結句）

コノジセ***ッ***ノノウ（この時節の能）（以下、略）」

　＊ここではブロック斜体の「***ッ***」で示してあります。

さらに時代をさかのぼり、院政時代ころの和語の促音については、次のような観察があります（外山　昭和47：227）。

「促音も、すでに前代（筆者注：古代）に発生し（擬声・擬態語などでは本来あったであろうが）訓読語を中心に多く見られる。（改行）本期においても、ひきつづき訓読語を中心に、片カナ混り文などに多く見られる。（改行）促音は、撥音とその調音点が近似しているため、その表記は同じ形をとることが多かった。前代においては、むしろ同一の音韻として考えられていたと思われるふしがある。（改行）本期においても、前期（院政・鎌倉）の間は、撥音と同じ符号（レ）か無表記かが、ふつうの表記法であったと云われる。

『高山寺蔵古往来』（院政末期）では、

のごとく両用の表記がみられ、さらに同書には、「」「」のごとく「ツ」を用いた例もある。（東洋大学「王朝文学」九号、昭和四〇・十二）。

右の「ツ」表記によるものは、院政から鎌倉初中期にかけて個別的に見えはじめ、鎌倉後期に至り、かなり一般化してくるようである。」

そこで舌内入声の表記の変化をみると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D | E | F | G | H |
| 奈良・平安 | 948年 | 1002年 | 1079年 | 1211-6年頃 | 1418年奥書 | 1603年 | 2000年 |
| チ/ツ | ム | 撥音符号 | 同音字表記のみ | みなすてて | 小書きのッ | chi/tçu,t | チ・ツ・ッ |

A.「薩」：「サチ・サツ　（入）曷」（曷韻はat；藤堂編　昭和53：1137）。新漢音は「「菩薩」‘ホサ’」（藤堂　1980：173）。

B.『漢書楊雄伝』：「…　巖突　●…」（吉澤　昭和6：215）。●は「人」（ひとかしら）に「㣺」（したごころ）の字。

C. 石山寺蔵法華義疏（長保4年加点1002年）：岩淵　昭和52：240。

D. 金光明最勝王経音義（承歴3年；1079年）：同書：240。

E.『無明抄』（鴨長明の歌論書：1211年頃）：「（上略）はねたる文字、入声の文字の、かきにくきなどをば、みなすててかくなり。万葉集には、新羅をばしらとかけり。（略）」（同書：149）。

F.『花習内抜書』（世阿弥自筆か。1418年の奥書）：「コノジセッノノウ（この時節の能）」（同書：60）。また『松浦の能』（世阿弥自筆1427年）には「ジセッモ」（時節も；同書：60）。

G.『日葡辞書』：「Bet.ベ***ッ***（別）Bechi.（べち）」「 Butji.ブ***ッ***ジ（仏事）　Butçuji（仏事），tomuray（弔い）に同じ．」（土井・森田・長南編訳　1980：53,68）。

H.現在の促音は小書きのツ。

1. ふたたび「」の表記を考える

この節ではふたたび「脚榻」の表記を考えることにします。第4節では宋代の弱化した入声（声門閉鎖音/ʔ/）を禅僧が持ち帰り、その音が当時の日本語に存在していた促音ツ（/Q/）に似ていたためにツで表記されたという、濱田氏の考えを紹介しました。

そこでこれからの議論の出発点となる、濱田氏の考えを次にみておきます（濱田　1950a:103）。

「（上略）若ししかりとすればキャタ（脚）チャ（）の如き語尾に現れるこの（筆者補：唇内）入聲音までも「ツ」と表記（原注）し、而も現代語で文字通りtsuと發音することは、從來考へられてゐた樣に例へば「雜」や「立」が一般に單獨でも「ザツ」（zatsu）「リツ」（ritsu）と發音されると同樣、熟語の上部要素となつて促音化し、これを一般に「ツ」で表はした爲に、後にその假名に引かれて、下部要素となつた場合或は單獨ででも「ツ」と書きtsuと發音される樣になつたと説明せらるべきではなくして、むしろ當時の本國音（筆者注：唐末～宋頃、弱化した入声、つまり声門閉鎖音）が我が促音と相似たものであつた爲と考ふべきものかも（原注）知れない。（以下、略）」

＊波線と下線は筆者。

＊小松氏の考え（波線）を唇内入声にたいする「誤認説」（あるいは同認説）、また濱田氏の考え（下線）を「声門閉鎖音説」と、いまよんでおきます。

＊「唇内入声字が上位字となる場合には、フ入声・入声が現われ、下位字となる場合には常にフ入声のみが現われるのであるから（略）」（沼本　1974：7）。

ところで濱田氏の上の「声門閉鎖音説」を批判して、小松氏は最初に検討されるべき問題があるとして、次のように述べられています（小松　1956：69）。

「さて、これらの字（筆者注：唇内入声字）について、なぜこのような特殊な現象がみられるのかを解明するに当って、最初に検討されなければならないのは、この分化（筆者注：ウ音化（「」）と促音化（「」））の契機が中国語自体のなかにあったか否かである。時代を中古音以前に限定するならば、

a、韻書や字書に舌内入声またはそれを暗示するような反切が見当らない。

b、上古音においても同様である。（原注5）

c、「立」「粒」など、同一の反切を持つ文字が、別種の分化をとげている。

d、平安朝以前の資料において「ツ」表記した例は極めて稀である。

などの諸事実によって否定される。またこれらの字と同一の諧声符を共有し、使用頻度の高い字が、舌内入声韻のなかに見出せないようであるから、いわゆる百姓読みであると考えることも妥当性を欠くようである。

問題とされねばならないのは、従って唐代末期以後の中国本土における入声音の消滅過程との関係である。（略）それ（筆者注：中国語入声p/t/k）が全く消滅する以前に、現代呉語にみられるようなglottal stop（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/。第4節参照）の段階が存在したことは確かであり、それが宋代以後輸入された字音に反映していること（下線は筆者）と、いま取り上げた問題との間の必然的連関があるかどうかを明らかにしておく必要があるのである。（以下、略）」

＊下線は先に紹介した濱田氏の考え。

＊「立」「粒」：「力入切」（陳等重修　民国80:532）で同音（緝韻ɪĕp）。「」は促音化、「」はウ音化（フ入声）。「接」（精母葉韻tsiɛp）は無気破擦音、「妾」（清母葉韻tshiɛp）は有気破擦音。

そして小松氏は唇内入声のツ表記と中国の入声韻尾消失とのあいだには関係はないと、次のように述べられています（小松　1956：70）。

「（略）この（筆者補：唇内入声pがツ表記される）現象は、中国における入声韻尾崩壊の過程とは別個に―すなわち国語史の側面だけから―説明できることになるのではないかと思うのである。」

このように唇内入声の変化にたいする考えには濱田氏と小松氏（また沼本氏）には違いがみられます。

そこで筆者の理解によって、その違いをまとめると次のようになります。

上古　　　　隋～唐代　 　　　　　　　 宋代　　　　　　　　　 　現代

中国語：t/p--------→t/p---------------------→ʔ----------------------→φ（消失）

　　　　　　　↓（呉・漢音）　　　　　 ↓（禅僧が宋音を持ち帰る）

入声p（濱田説）　：↓　　↓　　　　　　　　　ツ（促音Qに似る）-------→ッ（Q）

入声p（小松説）　 ： p---→p--→Φu→Φ→ツ（舌内入声Qに誤認）--------→ッ（Q）

入声p（沼本説）　 ： p---→p-----------→ツ（促音Q）-------------------→ッ（Q）

入声t（各氏同じ） ：t---→t---→ツ（促音Q） --------→ツ（Q）--------→ッ（Q）

奈良・平安～院政時代　　 鎌倉時代　 江戸初期　　　　現代

＊時代は概略。

＊濱田説（同認説）：中国語の弱化した声門閉鎖音を促音ツに似ていた（近似）と考えるもの。

＊小松説（誤認説）：舌内入声がすでにツで表記されていて、そのツに誤認されたとみる考え。

ところで唇内入声pがツと表記された理由については各氏違っていますが、宋音の唇内入声字が当時の促音ツに似ていた（同認であれ、誤認であれ）と考えると、『日本国語大辞典』が「「脚榻子」の唐宋音よみ」（第2節参照）と記述していることには疑問がでてきます。なぜなら鎌倉時代、禅僧が持ち帰った宋音を「脚榻子」と考えれば、その語尾の「子」（止韻4等上声iei）は陰類（韻尾が母音）であり、唇内入声はその当時弱化した声門閉鎖音であったとみる通説と矛盾するからです。そこで禅僧が持ち帰った宋音を「脚榻」とみれば、「榻」（透母盍韻thap）の韻尾が声門閉鎖音に弱化していて、その声門閉鎖音が促音ツに似ていたと考えることができるでしょう。また室町時代の古辞書に「脚榻」はみられても「脚榻子」はみられません（第3節参照）。さらに江戸初期の『日葡辞書』には「Qiatatcu.キャタツ（脚榻）　Qiatat（脚榻）という方がまさる.同上.」（土井・森田・長南編訳　1980：492）との記述がみられ、室町～江戸時代の辞書に「脚榻子」の語がみられないことも、「脚榻」が宋音とみる考えを支持できるでしょう。

そこで鎌倉時代、禅僧が持ち帰った宋音は「脚榻」であり、「脚榻子」は現代の学者が作りだした幽霊語であると考えてみます。しかし、そう考えてもなお疑問は残ります。なぜなら第2節でみたように、禅僧が持ち帰ったと考えた「脚榻」の語は現代中国語の辞書にはみられず、かわりに「脚踏（子・儿）」がみられます。しかし中国古代の「脚踏」が現在まで残存したのに、宋代の「脚榻」は消滅してしまったと考えることは難しいでしょう。そこで宋代の中国語には「脚榻」がそもそも存在しなかったと考えれば、宋音として持ち帰ることができない「脚榻」を禅僧が持ち帰ったと考えなければならず、これまた矛盾が生じるでしょう。そこでこの矛盾を回避するために宋音として持ち帰ったのは「脚榻」ではなく、耳で聞きおぼえた（いまローマ字でかりに）kyataʔであったと考えなおしてみます。そしてその韻尾にあった声門閉鎖音（[ʔ]）が当時の促音ツによく似ていたことから、当時の禅僧はkyataʔの表記として「脚榻」をあてたと考えれば、上の矛盾を解消できるでしょう。

しかし、しかしです。このように考えると、また違った疑問がでてきます。第3節で室町時代の「キャタツ」関連語を紹介しましたが、『下学集』（1444年）や『撮壤集』（1454年序）など主に古い辞書には「脚蹈」や「脚踏」がみられます。それにたいして『温故知新書』（1484年）や『書言字考』（1741年）などには「脚蹈」や「脚踏」はみられず、「脚榻」がみられます。そこで「脚蹈」（「脚踏」）と「脚榻」の表記の時代差を考えれば、鎌倉時代の禅僧が持ち帰ったkyataʔは「脚榻」ではなく、「脚蹈」（「脚踏」）だったのではないだろうかと考えられてくるでしょう。このように「脚榻子は宋音だったのか」という疑問から考察をはじめて、ついにそもそも禅僧が持ち帰ったのは「脚蹈」（「脚踏」）ではないかという考えにまでたどりつきました。しかし「脚蹈」や「脚踏」は奈良・平安時代に中国から借入していて、すでに日本に存在している「脚蹈」（あるいは「脚踏」）を再び宋代に持ち帰ったと考えるのは矛盾するでしょう。

では古代の「脚蹈」（「脚踏」）と江戸時代の「Qiatatcu」（「脚榻」：前引）との関係はどう考えればよいのでしょうか。そこでこの難しい問題を解決するために新漢音のかな表記についてみてみます。唐末に移入された新漢音では「「菩薩」‘ホサ’　漢音なら「薩」‘サツ’」（藤堂　1980：173）のように、舌内入声「薩」（心母曷韻1等sat）の語尾は表記されていません。そしてこのような入声語尾の無表記は中国語の中古入声の弱化した声門閉鎖音（[ʔ]）の状態をを反映している（藤堂　1980：173；第4節参照）とみられるので、新漢音の「薩」の変化をsat→saʔ（サ）のように考えることができるでしょう。そしてその後、「薩」の発音saʔ（サ）の声門閉鎖音が促音ツに似ているととらえられるようになったと考えれば、舌内入声（t→）ʔがツ表記されるようになったこと（促音Qの発生）をうまく説明できるでしょう（無表記されていた声門閉鎖音がなぜ促音ツとしてとらえられるようになったのかという疑問はいま不問にします）。そこで同じように唇内入声（p→ʔ）も舌内入声tに誤認（小松氏の考え、あるいは同認）され、漢音kyatəʔの発音はkyataʔに変わっていったと考えれば、kyataʔが唇内入声字の「榻」（透母盍韻thap）を使用した「脚榻」の表記が『温故知新書』（1484年）にみられることをうまく説明できるでしょう。

そこでこの発音の変化が表記をかえたというアイディアを発展させると、発音X1（「脚蹈」）が時代とともにX2に、そしてそのX2がX3に、さらにX4（江戸中期以後は訓よみの表記にかわる）へと変わることに応じて、それらの表記が変わっていったと考えることができるでしょう。

この大胆な、思いもよらない考えは次のようにあらわせるでしょう。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 単字 | 脚蹈 | 脚踏 | 脚榻 | 脚達 | 脚立 |
| 単字の韻目中古音 | 号韻（dog→）dau | 合韻dəp | 盍韻thap | 曷韻dat | 緝韻lɪěp |
| 中古音による説明 | X1-----------→X2--------→X3-------→X4-------→X5 |
| kyadog-------→kyathəT---→kyathaT-→kyatatsu-→kyatatsu |
| 有気清音化/入声弱化　重韻合流　開音節化　訓表記 |

＊「脚」の変化は考察せずkyaで代用。T：詰字のT（第10節参照）。

＊普通話では「踏」と「榻」は同音tà。「榻」は中国語で「狭い寝台」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1376）。また日本語の「」は「①（略）（筆者補：牛車の）乗り降りの踏み台とするもの。（略）②腰掛。ねだい。（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和49（第9巻）：497）。

＊「1） 1等重韻の合流。（略）東一・冬（通摂），咍・灰・泰（蟹摂），覃・談（咸摂）がそれである。これらは『慧琳音義』（筆者補：784－807年成）の反切下字では区別されていないので，それぞれ一つに合していたものと認められる。」（平山　昭和42：159）。

そこで平声の覃韻əmと談韻am（その相配する入声は合韻əpと盍韻ap）が合流したと考えれば、kyatəʔからkyataʔのへ変化（「脚踏」→「脚榻」）を考えることができるでしょう。このəからaの変化は「歌戈魚虞模古読論争の学史上の意義」（慶谷　1997：51－60）参照。そしてこれは本居宣長が「」（1775成）の「オヲ所属弁」（筆者未見）のなかで、「ア行に「ヲ」を、ワ行に「オ」を所属させている誤りを正した」（三木・福永　昭和41：132）ことにも関係しています。

なお詰字T（kyathəT/kyathaT）の表記にかえたことは第12節の倭人伝「末盧」の表記を参照。上の変化に内在する数々の疑問にたいする説明はのちの更新で考察します。

＊筆者の子供時代には「紙屑が入れられる穴の空いた」踏み台がありました。そのような踏み台だった「」（kyathaT）の音が江戸中期にkyatatsuへと変わったことで、tatsuと読まれる「達」を用いた（「足が達する」意）「脚達」へと表記が変わり、さらに工事現場や農園などで使われる「足が立つ」用具へと用途が変わったことによって、訓読みの「脚立」へと表記がかわったのではないでしょうか。

さて、ここからも声門閉鎖音ʔが当時の促音ツ（Q）に似ていたという、濱田氏の考えによって考察を続けることにします。

ところでこの濱田氏の考えと同じようにみえて、しかし似て非なる考えがあります。それは禅僧の持ち帰った声門閉鎖音が師資相伝によって、あるいは他の学僧や博士家の学者たちに伝わるなかで、声門閉鎖音が促音ツに変化したとみる考えです。

この新しい考えと濱田氏の考えは次のように比較できるでしょう。

上古　　中古　　 宋代　　　　　　　　　　　　　　現在

中国語唇音入声　：p-----→p------→ʔ----------------------------→φ（消失）

↓（禅僧が声門閉鎖音[ʔ]を日本に持ち帰る）

日本語（新説） ：　　　　　　　　 ツ（＝ʔ）→ツ（Q）------------→促音ツ（Q）

（濱田説）：　　　　　　　　 ツ（≒Q）---------------------→促音ツ（Q）

＊わかりやすく新説はʔ→Q、濱田説はʔ≒Qと考えてあります。

＊上では唇内入声を禅僧が持ち帰ったと仮定しています。

では当時のツは禅僧が中国で習い覚えたところの弱化した唇内入声（声門閉鎖音）そのものだったのでしょうか。それとも濱田氏が考えられたように声門閉鎖音に似た促音ツだったのでしょうか。

1. 声門閉鎖音と促音の似かよりについて考える

前節で提起した疑問は声門閉鎖音と促音との似かよりにあり、まず現在の促音の特徴を次にみてみます（高山倫明　2012：129,28）。

1.「促音は母音のあと、かつ無声の破裂音・破擦音・摩擦音のまえに現れるのを原則としており、次のような、表情音や強調形、あるいは外来語といった周辺的な部分をのぞけば、促音に有声音が連続することはない。

・スッゴイ（凄い）、ガンバッゼ（頑張るぜ）、ヒッドイ（酷い）、スッバラシー（素晴らしい）、アッラー（あらあら）…

・バッグ（bag）、バッジ（badge）、ベッド（bed）…

例外となる外来語も、日本語への馴化にともなって後続音が無声音に変わる傾向がある。

・バック、バッチ、ベット…」

2.「方言によってはコッゴ（国語）・カッジャ（鍛冶屋）・テッドー（鉄道）・ヤッバ（役場）などの語形を普通に有するところもある。（略）」

またツ表記される音については次のような観察があります（城田　1995：94）。

「**注記**　≪ギャーッ≫≪キャーッ≫のような強調的・創作的オノマトペや強調的心情表出の感動詞≪ハイッ≫などでは，閉鎖が声門，時には舌の先と歯茎でつくられることがあり，日本人には表記（ッ）からも伺えるよう，つまる音Tともとれるような子音が出現する。（略）」

＊「日本語には兩者ともに現われるが，（筆者注：「ゆるやかな声立て」に対立する、「はっきりした声立て」の）「あッ」[aʔ]というときには特に強い聲門内破音で止められる。」（服部　1951：28）。

このように声門閉鎖音と促音はよく似ているとみられるのですが、服部氏はその関係を次のように考えられました（上書：170）。

「（イタリア語の重子音については省略）日本語の「つまる音」は概略的にいってその後續子音とともに重子音をなすといえる。たとえば，[issuɴ](一寸), [iʃʃaku](一尺)，[ippo:](一方)，[itto:](一等)，[ikko](一個), [ittsu:](一通), [ittʃi](一致)．しかし，この重子音の前半部においては喉頭の緊張が共通して存在するから，これらは音韻論的には/’iʔsuN，’iʔaku，’iʔpoo，’iʔtoo，’iʔko，’iʔcuu，’iʔci/と解釈すべきものである．」

しかし促音（[Q]）と声門閉鎖音（/ʔ/）の関係を上のようにみる服部氏の考えにたいして、次のような批判があります(城生　1977：119)。

「（上略）しかし、例えば/Q/が有する共通の特徴は、[is▢s’ɯɴ](一寸)、[iɕ▢ɕ’o](一緒)、[ip▢p’oɴ](一本)などの例からも明らかなように、声門閉鎖音[ʔ]の存在などではなく、むしろ先行子音を一モーラ分遅らせてから開放させる点にある。このことは、発音時の喉頭の運動をdynamicに観察した結果、/Q/に該当する部分ではむしろ声門が開いていることを報告した沢島正行（一九七三）の研究などによっても裏付けられている。（下略）」

このように促音（/Q/）と声門閉鎖音（/ʔ/）は「似て非なるもの」とみられるのですが、琉球方言にはそれを裏づける次のような報告があります (寺師 1985：47/柴田 1988：332,366)。

1．「上のように方言では，促音の後のkおよびtには’（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）がついてk’およびt’の形（筆者注：喉頭化音）になるのが普通である。従って特に漢字音の読み（筆者補：「sïQk’ak’u」（「折角」；寺師 1985：22））にまでその傾向が強く出て, 標準語との趣きの相違を目立たせている。」（奄美名瀬方言）

2．「喉頭化音も声門閉鎖音も喉頭の緊張を伴い、喉頭において調音されるという点で、性質を共通にする。もっとも、つまる音のQにも喉頭の緊張があるが、Qは音節末に来るか、ときに自ら音節を形成する（例、Qs’a 「足」）点で喉頭化音とは異なる。」（奄美喜界島羽里方言）

3．「なお、Qのあとのp、t、c、kはつねにp’、t’、c’、k’となる。Qの持つ喉頭の緊張があとの子音にまで及んだ結果である。音韻論的に有意味ではない。」（那覇市久米町方言）

＊喉頭化無気音（Cʔ）と無声有気音（Ch）の音韻的対立を最初に報告されたのは奄美喜界島方言を母語とする岩倉市郎氏です（岩倉　昭和16:(2)）。ところで八重山の方言学者宮良当壮は喉頭化子音（Cʔ-）と語頭促音（QC-）の違いを認識できなかったと、上村氏は述べられています（上村幸雄　昭和57：解題14－5）。

＊八重山石垣方言の語頭促音と喉頭化母音の例：「[ʃʃiɴ]（知っている）」「[ʔiʃi]（石）」（中本　1976：222,222）。

なお上村氏は「「語頭促音」プラス破裂音（筆者注：QC-）という音声と語頭の喉頭化無気破裂音（筆者注：Cʔ）とは音声的に非常に類似しており，かつ歴史的には前者から後者への移行関係（筆者注：簡略にQC→Cʔ）が認められるから、（略）」（上村幸雄　昭和57：15）と考えられていますが、この考えは間違いです（第11節　「有って」の変化参照）。たとえば中世朝鮮語のpt-/pc-/ps-が現代陸地方言（ソウル方言など）で t’-/c’-/s’-（ともに濃音）に、それにたいして済州島方言ではth-/ch-/s’（有気音と濃音）に変化（福井　2013：75の表4.3より）しています。そこである不明のX を考え、ソウル方言などではX（→pt/pc/ps）→ʔt/ʔc/ʔs（濃音 ʔC）、また済州島方言ではX（→pt/pc/ps）→th/ch/ ʔs（有気音Chと濃音 ʔC）の変化を想定し、その不明の先祖Xをさがす必要があるでしょう。以前の更新の「10．合用並書表記を考える」（～/korean1hp.docx）参照。

このように声門閉鎖音と促音とがよく似ているとはいえ、音声的に同じものではない（ʔ≠Q）ので、何か特殊な事情（理由）がないかぎり前節で考えた新説（ ʔ→Q）は成りたたないようにみられます。そこでいまは禅僧の持ち帰った声門閉鎖音（/ʔ/）が当時の促音ツ（/Q/）によく似ていた（ʔ≒Q）という、濱田氏の考えを認めておきます（ ʔ→Qの変化を想定できる特殊な事情については第12節参照）。

1. 『日葡辞書』『訓民正音』の入声を考える

さてここからは禅僧が持ち帰った声門閉鎖音（弱化した唇内入声）は当時の促音ツによく似ていたためと考えます。しかしそう考えるためには当然舌内入声tがその当時までに促音のツ（Q）に変化していることが必要です。そしてそのことは舌内入声がtである、つまり借入元の中国語の中古舌音入声がtであることを前提にしていえることです。

ところで中国語の中古入声tを借入した日本語の舌内入声は次のようにみられています。

1．古代に借入された舌内入声tが呉音でチ、漢音でツとして伝わった。

2．古代に借入された舌内入声tが江戸初期の1600年ころまでtとして残存した。

そこでここからは二つ目の舌内入声tが江戸初期の1600年ころまでtとして残存したという問題を考察することにします。

宣教師ロドリゲスの『日本大文典』（1604-8年）には、入声形tと開音節形ツの関係について、次のような記述がみえます（土井訳注　昭和30：642,231）。

「（上略）日本のことばはすべて母音か子音のN，Tかに終ってゐる。（略）」

「〇ある綴字でTに終るものは，日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって，そのTを‘詰字’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてTそのものを写す文字がないので，「Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」

上の記述は次のようにまとめることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 入声形 | 開音節形 |
| ロドリゲスの記述 | T（詰字） | 母音ツ |
| 文典中の表記 | t | tçu/chi |

＊「tçuqui（月）/catçu（勝つ）」（同書：319,46）。博多方言では「Xŏguachi（正月）をXŏbachiなどといひ、（略）」（同書：611）。

＊『日葡辞書』では、「Xŏguat.シャゥグヮッ（正月）」（土井・森田・長南編訳　1980：791）。「月」：「疑母月韻ŋïuʌt」（藤堂・小林　昭和46：68）。

筆者はロドリゲスの原著をみていず、また読む能力もありませんので、以下、土井氏の訳文で考えていきます。

ロドリゲスは「詰字のツ」（T）とみられる語にたいして、「Butmiŏ（仏名）/Xet（節）」（土井訳注　昭和30：68,756）のようにtで表記しています。そこでささいな疑問が起こります。なぜなら「仏名」や「節」の韻尾が通説のようなtであったなら、なぜロドリゲスは「…Tかに終ってゐる」ではなく、「…tかに終ってゐる」と記述しなかったのでしょうか。このような疑問をもてば、ロドリゲスが「詰字のツ」とよんだTは通説のようなtではなかった（T≠t）とみるのが自然でしょう。そこでロドリゲスの記述をみなおすと、「Tそのものを写す文字がない」と述べているので、たとえば「月」（GuaT）の表記を説明するためには、Tではない代用のtを使って、「Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」と述べたのではないかと考えられてきます。

このような筆者のささいな疑問は濱田氏も次のように表明されています（濱田　昭和58：84）。

「（上略）従って、その当初においては、一往音韻体系外の特殊な発音形式（筆者注：舌内入声をt）として取扱うことが許されるにしても、八百年もの間永続した後における、一般的な発音をも同様に考えることが出来るかどうかは、甚だ疑わしいと言わざるを得ない。」

では古代に借入した中国語の舌内入声は江戸初期でもtだったのでしょうか、それともそうではなかったのでしょうか。

そこでこの疑問を考えるために『訓民正音』（1443年成）をみると、終声（ㄷ：t）については次のような記述がみられます（趙訳注　2010：173）。

「「質」、「」などの韻は「ㄷ」音（[t]）を終声とすべきであるのに、世間では来母（[l]）を用いる。来母の声はゆるやかで入声にふさわしくない。これは四声がかわったものである。（以下、略）」

上の『訓民正音』の規定にたいして、『東国正韻』（1448年刊）の序には次のような記述がみえます（同書：182）。

「（略）さらには質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補うというように、俗音を基本に正したので、古くから続いてきた誤りはここに至って尽く改まった。」

＊下線（筆者補）の原文は「以影補来」「因俗歸正」。

そして趙氏は上の「以影補来」について、次のように訳注されています（同書：182－3）。

「（2）　以影補来…入声のうち、中国音で[-t]に終わるものは、朝鮮漢字音ではㄹ（[-l]）に終わる。しかし「ㄹ」は閉鎖音でないため、厳密には「入声」と呼ぶには相応しくない。そこで、『東国正韻』の編纂者は、「ㄹ」に声門閉鎖音「ㆆ」（[-ʔ]）を添えて「ㅭ」（[-lʔ]）という、いわば現実の漢字音と、あるべき入声の閉鎖性との折衷的な人工音を考案した。（略）」

＊「（上略）-tと-lを折衷してㆆ（ʔ）音を利用してㄹ（l）音の弛緩性を補おうとした試みの結果である。このような努力をこの序文では「因俗帰正」と表現した。」（姜　1993：203）。

このように『東国正韻』では中国語舌音入声（通説t）をㄹ（l）ではなく、ㅭ（lʔ）と規定しています。

そこで日本を含めた現代の学者たちはこのlʔを「折衷的な人工音」とみて、『東国正韻』は「資料性において劣る」と、次のように断じています（河野　1968：27/福井　2013：79,243－4）。

1.「かやうに，東國正韻の字音は外見は極めて整然たる体系を示してゐるが，それは人為的な整理の結果であつて，この韻書の資料的価値を著しく低減せしめてゐる。（略）」

2.「その人為性のゆえに，東国正韻の漢字音は漢字音の歴史的研究において，より重要な伝来漢字音に比べて、資料性において劣るものとみなされてきた。筆者も漢字音の歴史的な研究という意味では，これは当然であると考える。」

3.「東国正韻式漢字音を廃止して伝来の現実漢字音を採用している点で（筆者補：『六祖法寶檀經諺解』1496年刊は）重要な資料となる。」

しかしここで注意すべきことがあります。なぜなら『東国正韻序』では俗音lをlʔへ「因俗歸正」（俗音を正した）と述べているからです。そしてこの「俗音を正した」という言葉を信じれば、正された俗音（当時の舌音入声）はl（ㄹ）ではなく、lʔ（ㅭ）であったとみなければならないでしょう。そしてそうであれば『東国正韻』のㅭ（lʔ）こそが伝来の舌音入声であり、その後、いわゆる伝来漢字音といわれている『六祖』のㄹ（l）に変化したとみるのが、『東国正韻序』の正しい読みかたではないでしょうか。

そこで15世紀ころの舌音入声韻尾をlʔ とみなおせば注76、中国語中古入声とそれを借入した朝鮮漢字音（入声）の変化を、次のように考えることができるでしょう。

　　　　 601年　　　　　1324成/1375年刊

　　　　切韻　　　　　　中原音韻/洪武正韻　　　　　　現在

中国語：tʔ----┬-------------→ʔ--------------------→φ（消失）

（北方方言）　　│　　　　　　　│

　　　　　　　│　　　　　　　洪武正韻譯訓（ㆆ：ʔ）

朝鮮語：　　　└------------→lʔ（ㅭ）---→l（ㄹ）--→ɭ（そり舌音l）

東国正韻　　 六祖　　 　現在

1448年刊　　1496年刊

＊以下は、『東国正韻』の「ㅭ」（lʔ）と『洪武正韻譯訓』の「ㆆ」（ʔ）が齟齬することにたいしての注記です。

中国語の「北方音では入声韻尾は唐、五代に弱化し始め、14世紀に声門閉鎖音（ʔ）になった」（李　1975：108）とみられています（第4節参照）。そこで当時（『洪武正韻』）の弱化した入声（声門閉鎖音/ʔ/）を中世朝鮮語においてそのまま引きうつしたもの（諺訳）が『洪武正韻譯訓』にみえるㆆ（ ʔ：たとえば下表の「質」の北方方言は지ᇹciʔ)です。それにたいして唐代に借入された入声はlʔに変化し、その後15世紀にはlに変化していたとみられます（『訓民正音』には「世間では来母（[l]）を用いる。」）。しかし当時の学者にはlの先祖であるlʔの記憶が生々しく生きていた（当時はlʔ→lへの過渡期であった）ことから、『東国正韻』では「因俗歸正」としてlʔであると規定しなおしたと考えれば、『洪武正韻譯訓』がㆆ（ʔ）であるのに、同時代の『東国正韻』が「ㅭ」（lʔ）としている矛盾を回避できるでしょう。

＊tʔ： 通説ではt→lの変化が考えられていますが、『東国正韻』の俗音lʔを認めるなら、t（中古）→lʔ（東国正韻）→l（六祖）と考えるより、tʔ→lʔ→lの変化を考えるほうがより説明が楽になるでしょう。しかし現在のㄹはlではなくそり舌のɭなので、中国語中古入声がtʔ→ɭʔと変化したのはなぜかという疑問を説明するためにはX→ɭʔ→ɭ（『六祖』以後）ような変化を考え、ɭʔへの変化を説明できる、ある不明の舌音Xを探す必要があるでしょう。

＊ㄹ（l：翻字はr）。「（2）流音＜ㄹ＞[ɾ,ɭ]（中略）語末では、そり舌音[ɭ]で、舌先の裏の部分を上顎の歯茎と硬口蓋の境目に付けて発音（例：물[muɭ]「水」）（第4課参照）します。」（羅聖淑　2008：9）。

＊金　2003：147より下表を作成。声調（傍点）は省略。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 「質」（質韻3等：ｔʃɪět） | 『洪武正韻譯訓』 | 『東国正韻』 | 六祖 |
| 1455年刊 | 1448年刊 | 1496年刊 |
| 지ᇹ（北方音:ciʔ) | 지ᇙ（cirʔ） | 질（cir) |
| 짇（南方音:cit) | － |

＊『洪武正韻譯訓』：「明の韻書『洪武正韻』（1375）をハングルによって注音したものである。」（福井　2013：233）。

＊六祖（『六祖法寳檀經諺解』）：「唐の六祖大師慧能の説法をまとめたものを諺解したもの。」（同書：243）。

1. 江戸初期の「ツ」の音を考える

前節では『切韻』時代の中古舌音入声韻尾をとりあえずtʔと考えましたが、そうであれば同じころ（唐代）に借入した日本語の舌内入声もtではなく、tʔであったと考えられるでしょう。そこでその是非を考えるための準備として、江戸初期のツについて考えることにします。

まず、当時の日本と外国資料にみえる「（時）節」の表記を次にみてみます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D |
| 松浦の能 | 日本風土記 | 難語句解 | 日葡辞書 |
| 世阿弥 | （明人）侯継高 | バレト神父 | イエズス会宣教師 |
| 1427年 | 1592年ごろ刊 | 1592-3年刊 | 1603年刊 |
| ジセッモ（時節モ） | 設子　せつ | Jixet（時節） | Iixet　時節 |

＊「」：精母屑韻4等tset→tsiet。「設」：審母薛韻3等ʃɪɛt。「子」：精母止韻4等（上声）tsiei。「近代[ɿ]」（佐藤昭　2002：80）。

＊A：岩淵　昭和52：60。『花習内抜書』（1418年奥書）には「コノジセッノノウ（この時節の能）」（同書：60）。

＊B（『全　浙兵制考日本風土記』）：

「中秋阿金那設子あきのせつ/冬至府由那設子ふゆのせつ」（京大国語国文研編　昭和36：60,60）。

＊C：「Jixet.fi,toqi,hora.tépo determinado &t」（森田　昭和51：31左8行）。

＊D：「Iixet.ジセ***ッ***（時節）」「Xet.セ***ッ***（節）」「Xetbun.セ***ッ***ブン（節分）」（土井・森田・長南編訳　1980：366,756,756）。

また『三本對照捷解新語』（1676年刊：以下、捷解新語と略）と『重刊改修捷解新語』（1782年刊）には、次のような表記がみられます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | せつ/せつつ（節） | しせつ（時節） | せつく（節句） |
| 捷解新語 | 셰쭝（syəi ccuŋ）/셔쭈（syə ccu）せつ） | 시셰쭝（sisyəi ccuŋ） | 셷구（syəit ku） |
| 重刊改修捷解新語 | 셰쯔（syəi ccɨ）/셷즈（syəit cɨ：せつつ） | ᅀᅵ셰쯩（zisyəi ccɨŋ） | 셷꾸（syəit kku） |

＊『捷解新語』：京大國語國文研編　昭和47：14上/334上,102上,104上。

＊『重刊改修捷解新語』：同書：257下/334下,102下,104下。

上の셷즈の単書表記と셰쭝の初声を重ねた並書表記の違いは『捷解新語』の「有って」にもみられ、亀井氏はその違いを次のように比較されました（亀井　昭和59：363－4）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 表記 | 仮名表記--ハングル表記（翻字） | 本文表記 | ㄷ/ㄸの表記 |
| 単書 | あつて-----앋뎨（’at tyəi）  | 「つ」あり | 第一音節末と第二音節頭にㄷ（t） |
| 並書 | あて-------아뗴（’a ttyəi） | 「つ」なし | 第二音節のはじめにㄸ（tt） |

＊『捷解新語』（京大國語國文研編　昭和47：195上,245上）より再引用。『重刊改修捷解新語』には「あつて　앋뎨（’at tyəi）」（同書：139下）。

そして上の表記の違いから、亀井氏は単書表記を促音ツに、並書表記を次のようにみられました（亀井　昭和 59：367)。

「初声を重ねる形（筆者注：並書表記）はいはゆる勁音（된시옷）と同じく声門の破裂（glottal explosive）の音をあらはすものかと思はれる。」

＊「現代の音声学において，韓国語の特徴である濃音を発音するときに口腔の閉鎖の解放に先立って声門の閉鎖が観察でき，ゆえに濃音を[ʔk, ʔt, ʔp]と音声表記することが可能であるが，当時すでにこのような観察を行っていたということになる。」（福井　2013：23）。

＊「濃音は，韓国では「硬音」または「된소리」（筆者注：toin so li）とよばれるが、（略）」（福井　2013：23）。

ところで第7節で平安時代以前には和語（擬声・擬態語をのぞく）には促音のツ表記がみられないことを紹介しておきましたが、12世紀初頭に成った『類聚名義抄』（図書寮本）には促音を表記したとみられる入声・徳声点がみられます。

その入声・徳声点とは次のような特徴があります（小松　昭和56：197）。

「は、平声（低平調）のあとに-p,-t,-kの続いた音節であり、徳声は入声とも呼ばれ、上声（高平調）のあとに-p,-t,-kの続いた音節であって、いずれもCVCの形をとるものである。これらの音節末子音は、いずれも完全な破裂をおこさない内破音（-,-,-）であるために、音節全体の印象がぐっとつまった感じになるのが特徴である。」

その入声点をはじめて学界に紹介された、小松氏は次のように述べられています（同書：197-9）。

「十二世紀初頭ごろに編纂された漢和字書、『類聚名義抄』（図書寮本）の和訓の仮名には、（略）わずかながら、《徳》《入》の両声点が用いられていることが特に注目を引く。（中略）和訓の仮名に加えられたものとしては、これまでに知られているすべての文献資料を通じて、ここに見える左（筆者注：下）の四例が指摘できるにすぎない。注49

　　訴　ウタフ（入上平）　　　　　　〔七五5〕

　　訟　ウタフル（入平平上平）　　〔九二4〕

　　愬　ウタフ（入上平）　　　　　〔二七五6〕

　　経　ノトル（徳上平）　　　　　〔二八七6〕

（中略）要するに、入声点付きの「ウ」は、低い調子のu-という音節を表わしていることになる。したがって、「ウ（入）タ（上）フ（平）」は、全体として［u-a-Φu(u)］という語形が[○●○]《低高低》というアクセントで発音されることを示している。「ノトル」の方は「ノ」に徳声点が付されているので高い調子になるところが違っているが、これもまたタ行音の前であることに注目したい。すなわち、「ノ（徳）ト（上）ル（平）」とは［no-o-ru］が[●●○]《高高低》というアクセントを持っているという意味なのである。これらの入声点や徳声点は、内破音のだけに当たるものではなく、同時に「ウ」や「ノ」の仮名の高低をも示していることを忘れてはならない。［u],［no]はそれぞれ一つの音節として把握されているのである。（中略）すなわち、[uttaΦu]の[ut],[nottoru]の[not]は、いずれも漢字音の入声・徳声と同じ音声的特徴を持つものとしてとらえられ、そして、ここではそのように記号化されているということなのである。」

そして小松氏は日本語の促音表記の変遷を概略、次のようであると述べられています（同書：199-200）。

「促音便形における促音部分の無表記は、すでに平安時代初期の訓点資料から見えているが、それが文字化されるのは十一世紀に入ってからのようであって、はじめは「渉ワタム（て）」（←ワタリテ）、「昇ノホンテ」（←ノボリテ）などのように表わされている。（中略）その後、漢字音のに「ツ」の仮名があてられるようになると、この種の促音もそれにつれて「ツ」表記に移行し、それが「欲ホツス」「専モツハラ」のように、タ行の前以外の位置のものにまで拡大されて、平安時代のうちに促音の「ツ」表記はほぼ確立された。その伝統が今日にまで及んでいるのである。これをタ行音の「つ」[tsu]と区別して小書きにする習慣が確立されたのは、「現代かなづかい」になってからのことである。（略）」

このように促音ツの文字化はム表記からツ表記へとかわったのですが、『平家物語』（延慶本の奥書、1309年までに成立か）では促音ツが表記されなかったと山田氏は次のように述べられています（山田　昭和29：下巻1766）。

「（前略）以上、促むる音便はそのあらはれたるもの延慶本全體を通じて、一例だにも「ツ」字を用ゐずして、その本の音は勿論、促まれる音の記號をも加へざるは最も注目するに値ありとすべし。惟ふに長明が無名抄に「入聲の文字のかきにくきなどをばみなすてゝかく也」といへる如くに省きてかきあらはさゞるものか。然れども既に屡例示せる如くに寫聲の語にては「キツト」「サツト」など、「ツ」字を以て記載せるものあること既に第二章の第七節にも説きたるところにて明なる如くなれば、當時必ず入聲を記載せざりしものとはいふべからず。これを以て考ふれば、この音便は實は今日の東京語などにいふ如く、急促に呼ぶものにあらで、なほ平曲に保存せられたる如くに前の音を稍長く呼びて次の音にうつり行き、中間の音は實は微にして殆ど省かれたる如きすがたになりたりしものにあらざるか。なほ後の研究をまつものなり。」

＊「「コチ」は「アチ」の下に重ね用ゐたる例あり。（略）只今落人ニテアチコチサマヨワム事ノ～（略）」（同書：上巻192）。

＊第7節の舌内入声の表記の変化表参照。

ところで「（上略）延慶本にては「モチテ」を「モチ」とせるもののみを見る。（略）」（同書：下巻1760）との記述があり、この「チ」は現在の「もって」に変わっていることから、この「チ」には表記されないツが内在していると考えることができるでしょう。そこで通説の「促音ツの発生」とはこの内在化していたツが表記されるようになったことを示しているのであって、何もない無から有が生まれたということではないと知るべきでしょう。

そこで『捷解新語』の「あて」（ツの無表記）から『重刊改修捷解新語』の「あつて」（促音ツの表記）への変化を次のように考えることができるでしょう。

並書表記（捷）　　　　単書表記（重）　　　　 現在

表記：「あて」　　　　 　　「あつて」　　　　 　　「あって」

아뗴（’a ttyəi）　　앋뎨（’at tyəi）

発音：　aʔte--------------→［a-e］（＝aQte）---→aQte

＊捷：『捷解新語』。重：『重刊改修捷解新語』。
＊並書表記のʔteは濃音。［a-e］：小松氏の表記。Q：現在の促音ツ。

＊「」（院政末期の『高山寺蔵古往来』：第7節）は『捷解新語』の「あて」に対応。

同じように「節」の変化は次のように考えることができるでしょう。

並書表記（捷）　　　 単書表記（重）　　　　　　現代

表記：「せつ」　　　　 　　「せつつ」　　　　 　　　「せつ」

셰쭝（syəi ccuŋ）　　셷즈（syəit cɨ）　　　　　절

発音： seʔtsu------------→［se-sɯ］（＝seQtsɯ）--→setsɯ

＊「절（節）名せつ。ふし。（略）」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55：579）。＊（現在のツの母音）ɯ：ここでは平唇のウ（ɯ）の上部に‥（ウムラウト）記号を付加した文字の代用。

＊tsu→tsɯの変化には重大な問題があり、次回の更新で考えます。

ここまで舌内入声のツについてみてきたのですが、『捷解新語』には語頭・語中・語尾に関係なく次のような並書表記쭈（ccu）がみられます（京大國語國文研究室編　昭和47：276上,349上,71上/土井・森田・長南編訳　1980：623,285,462）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 語頭 | 語中 | 語尾 |
| つ加わしらる | につき | ふたつ |
| 捷解新語 | 쭈가와시라루（ccuka’oasiraru） | 닏기（nitki） | 후다쭈（hutaccu） |
| 日葡辞書 | Tçucauaxi,su,aita.（遣はし，す，いた） | Nicqi（日記） | Futatçu（二つ） |

＊『捷解新語』：「　읻빋（‘it pit）」（上書：363上）。「　뎐비쭈（ŋkotyənpiccu）」（同書：361上）。「　피도쭈（phitoccu）」（同書：35上）。「　기삳（kisat）」（同書：360上）。

＊『重刊改修捷解新語』：「　히도쯔（hitoccɨ）」（同書：69下）。

＊『日葡辞書』：「Ippit.イッピ***ッ***（一筆）」（土井・森田・長南編訳　1980：337）。

このように『捷解新語』では、ツにたいして並書表記の쭈が用いられているのですが、このような重ね子音表記はキリシタン資料においてもみられ、『かたこと』（京の俳人、安原貞室著1650年刊）では促音ツの表記としてあらわれています。

そこで「こち・あちこち・こそ」にたいする、それらの表記を比較すると次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | こち | あちこち | こそ |
| バレト本 | － | achi cochi（『難語句解』） | coʃso（『自筆写本』） |
| 日葡辞書 | Cochi（こち） | Achi,cochi（あち，こち） | Coso（こそ）副詞. |
| 捷解新語 | 고찌（ko cci） | 아찌고찌（’a cci ko cci） | 고쏘（ko sso） |
| かたこと | こち | あつちこち | － |

＊バレト本：

A.『難語句解』（『天草版平家物語難語句解』1593年）：「Xoxode,tokorodokorode achi cochi.」（森田　昭和51:61右10行）。

B.『自筆写本』（1591の年記）：「coʃso（コソ。25v-8.ほか22例）」（同書:324）。

＊『日葡辞書』：土井・森田・長南編訳　1980：134,11,151。

＊『捷解新語』：京大國語國文研究室編　昭和47：11上,28上,11上。

＊『かたこと』：「こち」「一あちこちといふべきを　〇あつちこちなどつめていふはあしかるべし。（略）」（白木編著　昭和51：33,45)。

そこで『捷解新語』と『重刊改修捷解新語』の時代差を勘案し、「促むる音便」を促音Qの先祖**Q**とみれば、『かたこと』の「あち」から「あつち」への変化を次のように考えることができるでしょう。

並書表記　　　　　単書表記　　　　　 　現在

表記：「あち」　　　　 「あつち」　　　　 　 「あっち」

発音：a***Q***ci（＝aT）----→aQchi---------------→aQchi

＊Q：現在の促音ツ（/Q/）。***Q***：山田氏の「促むる音便」（促音Qの先祖）。

＊T：ロドリゲスの詰字のツ（次節の「節」の変化参照）。

1. 江戸初期まで舌内入声はtだったのか

前節では『捷解新語』の「셰쭝」（「せつ」）の表記から江戸初期の「」をseʔtsuとみましたが、『日葡辞書』では「Xet」（土井・森田・長南編訳：1980：756）と表記されています。

このような入声形とみられる表記は当時の滞日者などにも次のようにみられます。

1.商人アビラ・ヒロンの表記

「五月Gonguatz」「今月 Conguat」「ござる goçaro/gozaru/gozar」（岩生・佐久間訳注　1965：90,93,91,316,346）

「Tabe marsuru（たべまるする、一〇五ページ）」（土井補注　1965：657）

＊この表記に対しては「（略）音節ruの略記と見るよりは、u母音が弱体化して、「まるする」から「まする」へうつる過程の1段階を示したものと解してよいのではなかろうか。」（同書：661）。

2. 宣教師コリャードの記述

「を聞く場合に單にfitòtçの如く聞こえるし、（略）」（大塚訳　昭和9：6）

＊このtç表記を母音の無声化とみるのは宮島氏（宮島　昭和36：46）。

＊前回の更新（～/japanese1hp.docx）の第12節（母音の無声化はいつまで遡れるのか）、第13節（「御座る」のルは無声化していたのか）、第20節（『狂言記』の「まつする」の表記を考える）参照。

ところで『日葡辞書』で入声形と開音節化形の両表記がみられることについて、次のような考えがあります（土井・森田・長南編訳　1980：854）。

「（上略）そのほか日葡辞書には，

Matçudai.l,Matdai（末代）

Qiatat.l,Qiatatçu（脚榻）

のように，見出し語に入声形と開音節化形とを並べ掲げたものがあり、Butji（仏事）のようにその開音節化形Butçujiをも見出し語に立てているものもある. 別条Qiatatçu（脚榻）の条にQiatatと言う方がまさると注し，Itonami,u（営み，む）の条に ButçujiよりもButjiの方がまさるとしているから，規範的には入声形を正しいとしながらも，話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい。」

＊「But.ブ**ッ**（仏）」「Butçuji.ブツジ（「仏事」）」「Butji. ブ***ッ***ジ（仏事）」（同書：67,67,68）。

＊「仏」（物韻ïuət）：「ブツ・ブチ・フツ」（藤堂編　昭和53：47）。

また『捷解新語』第10巻の候文体の書簡文の特徴として、「itpit」「kisat」（前引「一筆」「貴札」）のような入声形tがみられることから、濱田氏は次のように考えられました（濱田　昭和58：92）。

「（略）語末に立つ舌内入声韻尾が、二種の形[t][tsu]で現れ、前者はより生の漢語層に、しかも、その使用する者の側から言えば、比較的教養程度の高い階級層、しかも、あらたまった場で用いられたものであり、後者はこれに対して、より国語化した語彙に、しかも比較的教養程度の低い一般庶民の側で、しかもくだけた言い方として用いられたのではないかと考えられる。」

このように入声形tと開音節形tçu（あるいはtçやtz）など二つの語形がみられることにたいして、国語学者は文言（規範形）と口語（くずれた形）、また位相差（階級差や教養の高下）、あるいは方言の違いといったものを考えることでその違いを説明します。しかしこのような社会言語学的な説明をすることで、「舌内入声はなぜtとtsuの2種に分化したのか」という、舌内入声にたいする根本的な疑問が回避されてはならないでしょう。なぜなら上のようなわかりやすい、口当たりのよい説明では古代の入声（つまりは借入元の中国語入声）の真実に迫ることはできないからです。

そこでもう一度当時の舌内入声を考えるために、しばらくはtとtsuの分化を人物の譬えで考えていくことにします。まず江戸初期の舌内入声のtとtçuを全く違った人物A（入声t）と人物B（開音節化されたtsu）だったと考えます。しかしそう考えると、人も言葉も移ろい変化するのが自然なので、なぜ人物A（古代の入声t）が二人の人物A（江戸初期の入声t）とB（tsu）になったのか、またその人物A（古代の入声t）が1000年もの長い間生きながらえたのか不思議になってきます。そこで江戸初期に二人の人物AとBが存在したのではなく、人物Aの顔を正面ではなく右側からみた横顔をt（入声形）、また左側からみた横顔をtsu（開音節形）であると考えなおしてみます。そう考えれば先の文言（規範形）と口語（くずれた形）、あるいは位相差（教養の高低など）といった、さらには人物Aの「よそ行き」と「普段着」の話し方の違いといったことを同一人物（ロドリゲスは詰字のTと記述）の左右の横顔の見え方のちがい（tとtçu）として説明できるでしょう。しかしこのようにtとtsuを人物Aの左右の顔と解釈しても、人物A（詰字のT）の右と左の横顔がtとtsuのように全く違ってみえる理由を説明することは難しいでしょう。

そこで人物Aの顔に錯視現象を考えることにします。人物Aの顔（詰字のT）を正面からみると、ほんのちょっとした視線の違い（視線の移動）によって、人物Aの顔（t）にも、人物Bの顔（tsu）にもみえると考えます。この少々とっぴでありそうもない考えによれば、当然、人物Aの顔（t）が錯視（視線の移動）によって、ある時には人物Bの顔（tsu）にもみえるでしょう。そこで宣教師たちはその錯視によってみえたAとBの顔（聞こえた音）を忠実にtやtsuで表記したと考えることができるでしょう。このようにロドリゲスの詰字ツ（T）が『日葡辞書』などでtとtsuに表記しわけされていることを錯視（視線の違い）によると考えれば、なぜ古代の入声tがtとtsuの2種に分化したのか、なぜキリシタン時代まで入声tがtとして存続したのかといった、疑問そのものを消し去ることができるでしょう。

＊「北岡明佳の錯視のページ」（http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/tagi.html）のなかの「多義図形・反転図形」の「メールボックス」参照。

ところでtとtçuを音韻論的に一つのTであるとみる考えは、早くに濱田氏もだされています。

そこで筆者の理解によってまとめた濱田氏の考え（濱田　昭和58：94－5）と筆者の考えとの大きな違いを比較すると、次のようになります。

濱田氏の考え：音韻論的には一つの/T/。tとtçuは別音（通説）。

＊この考えでは、音韻論的に一つの/T/がなぜtとtçuと2音であるのか、またTはどのようにしてtとtçuの2音に分化したのか、なぜ1000年もtは存続したのかといった、解決不能な疑問がでてくるでしょう。

筆者の考え：音韻論的に一つの/T/（ロドリゲスの詰字T）。tとtçuは別音（2音）ではなく1音（同音）。錯視と考えたのは、もちろん説明の便宜からです。

上の比較からわかるように、濱田氏は表記しわけられたtとtçuを表記のままにtとtçuの2音と考えられ、詰字ツ（T）はtでもあり、tçuでもあるという真実を見逃されてしまったのです。

さて日本語の舌内入声をtとみる誤謬の謎はこれで解けたのですが、では『日葡辞書』で「Xet」と写された当時の「」の音は実際どのような音だったのでしょうか。それをこれから考えてみることにします

『捷解新語』の並書表記고쏘（「こそ」）の「쏘」（sso）は現在、濃音とよばれていて、次のような日本語の促音ともみえる音です（羅聖淑　2008：11）。

「「濃音」は、喉頭の強い緊張を伴う無声無気音です。例えば、（略）＜짜＞は、「まっちゃ」の「っちゃ」、＜싸＞は、「あっさり」の「っさ」に似た発音です。」

このように韓国語の濃音（「[ʔk, ʔt, ʔp]」；福井　2013：23）は日本語の促音とまぎれる音なので、その濃音（ʔCV：並書表記CCV）を喜界島方言の喉頭化音CʔVと考えてみます（第9節参照）。また「こそ」はバレトの自筆写本ではcoʃso、『日葡辞書』ではcoso、『捷解新語』では고쏘（kosso：koʔso）と表記されていますが同時代資料なので、それらを同音の表記と考えれば「こそ」は喉頭化音のkosʔoとみることができるでしょう。

そこで「節」と「こそ」（助詞）の発音と表記を比較すると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『松浦の能』 | 『日本風土記』 | 『バレト本』 | 『捷解新語』 |
| 1427年 | 1592年ごろ刊 | 1591の年記 | 1603年刊 |
|  | 推定音 | 原文表記 |
| （時） | setʔu | ジセッツモ | a.設子 | c.Jixet | e.셰쭝（seʔcu） |
| こそ | kosʔo | － | b.箇所 | d.coʃso | f.고쏘（koʔso） |

＊『松浦の能』：岩淵　昭和52：60。

＊a/b：京大国語国文研編　昭和36：60上段,46上段。

「箇」：見母箇韻（去声）ka。「所」：蔬母語韻（上声）ṣïo。

＊c/d（『難語句解』とバレト自筆写本）：森田　昭和51：31左8行,324。

＊e/f：京大國語學國文學研究室編　昭和47：14上,103上。셰쭝（syəi ccuŋ）はseʔcuで表記。

＊『重刊改修捷解新語』の「せつつ　셷즈」（syəitcɨ）/「こそ　고쏘」（kosso）：京大國語學國文學研究室編　昭和47：334-5下,103下。

＊『日葡辞書』：「Xet」「Coso」（土井・森田・長南編訳　1980：151,756）。

＊『西儒耳目資』(N.Trigaut：金泥閣著1626年刊)では北京官話との違いを、「（8）入声韻尾は，声門閉塞音/-・/（筆者注：/ʔ/）型として残っている。今日でも山西陜西官話には/-・/型入声がある。」（藤堂　1980：119）と記述。

そこでわかりやすいように上の推定音の音節の切れ目をナカ黒（・）で示すと、宣教師たちの「」の聞き取りとその表記を次のように比較することができるでしょう。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『松浦の能』 | 『日本風土記』 | 『難語句解』 | 『捷解新語』 | 『日本大文典』 |
| 各人の聞き取り | 世阿弥 | 侯継高 | バレト | 康遇聖 | ロドリゲス |
| se・T | se・tsɿ | se・tʔsu | se・ʔtsu | se・T（＝se・tʔçu） |
| 表記 | セ・***ッ*** | 設・子 | xe・t | 셰・쭝（se・ʔcu） | Xe・t |

＊『日葡辞書』は「Xet」（土井訳注　昭和30：820）。Tはロドリゲスの詰字（tçu）。

＊「設」（蒒韻3等ɪɛt）の入声韻尾（声門閉鎖音）は消滅し、「子」（止韻4等上声iei）は「tsɿ」（佐藤　2002：80）とみてあります。

このように当時の「節」「こそ」を喉頭化音のsetʔu・kosʔoと考えたのですが、しかし少々問題があります。なぜなら「漢字音のにツの仮名があてられるようになると」（小松氏の言葉：前引第11節）、あるいは中国語唇内入声は促音ツに似ていた（ʔ≒Q：濱田説）との考えにあるように、鎌倉時代の入声「節」は声門閉鎖音（ʔ）のあるsetʔuではなく、促音のseQであったと考えられるからです。そして第8節では当時の中国語の入声韻尾が消失し声門閉鎖音になっていたことで、新漢音の語尾が表記されなかった（語尾ツの無表記）とみました。そこでこれらのことを勘案すると、「節」の韻尾はt→ʔ（院政期）→Q（鎌倉期）→tʔu（江戸初期）のような変化を想定できるでしょう。しかしʔ→Q→tʔuのような声門閉鎖音が再び現れる変化は考えにくいので、setʔuからseQへの変化を矛盾なく説明できるアイディアが必要でしょう。

『捷解新語』の「せつ」（「셰쭝」：syəiccu ŋ）と『重刊改修捷解新語』の「せつつ」（「셷즈」：syəit cɨ）にはかな表記の違いがあります。しかし『捷解新語』と『重刊改修捷解新語』の「こそ」は同じ「고쏘」（koʔso；京大國語學國文學研究室編　昭和47：103上,103下）の表記がみられ、かな表記には違いがみられません。ところで前節の「」や「」でみたようにツの有無が促音ツ（Q）の有無に対応していることから、ツ表記のみられない「こそ」はkosʔo→koQso→kosoのような変化をしなかったと考えられます。そこで「こそ」（kosʔo→koso）と「節」（setʔu→seQtsɯ→setsɯ）の変化を両立させるために、現代の促音Q（/Q/）の先祖を***Q***と考え、その***Q***が現在の促音Qに変化したと考えてみます。

そしてその***Q*** CVは声門閉鎖音のある喉頭化音（CʔV）であったと考えれば、「こそ」「あつて」「せつ」の変化を次のように考えることができるでしょう。

江戸初期　　　　　　　　　　　江戸中期　　　　　 現在

「こそ」　：kosʔo＝ko***Q***so（coʃso：こそ）----------------------→koso（こそ）

「有って」：atʔe（＝a***Q***te＝aTe：あて）----→aQte（あつて）----→aQte（あって）

「節」　　：setʔu（＝se***Q***tu**＝**seT：せつ）--→seQtɯ（せつつ）---→set***ɯ***（節）

＊「節」の「セ」はseで代用。coʃsoはバレトの表記。T：ロドリゲスの詰め字T。Q：現在の促音（/Q/）。***Q***：Qの先祖（山田氏の「促まる」音：第11節）。

＊並書表記の뗴は喉頭化音tʔe、쭝はtʔu、単書表記の앋は’at（「あつ」）はaQと考えてあります。

＊***ɯ***：現在のツの母音（平唇のウ：ɯの上部に無声化記号（¨）を付けた記号の代用）。

＊ʔ（あるいはt）→Qの変化は言語学の教科書にはみられませんが（言語学的には否定される変化ということですが）、この解決策はのちの更新で考えるとして、とりあえずこのように考えておきます。次節の倭人伝の「末盧」（松浦）の表記参照。

このように『日葡辞書』の二つの表記tとtçuをただ一つの詰字ツ（T）とみれば、院政末期の『高山寺蔵古往来』にみえる「有」（ツの無表記）、江戸初期の『捷解新語』の고쏘（kosso：koʔso）やバレトの重ね子音表記のcoʃso、さらには江戸中期の『重刊改修捷解新語』の「셷즈」（syəit cɨ：seQtsɯ）のツ表記（促音ツの発生）などをうまく説明できるでしょう。

ここまでの考察から促音ツ（/Q/）の変化は次のように考えられるでしょう。

***T***→T（＝***Q***）→Q/tsu

＊***T***：上代の舌内入声、つまり借用元である中国語の中古舌音入声。

＊T：詰字のツ。Q：現在の促音（/Q/）。***Q***：Qの先祖（山田氏の「促むる音」：第11節参照）。

1. 上古音再構について思うこと

前節では『日葡辞書』のツがtにもtçuにも表記されている事実を錯視（視線の違い）の譬えを使って考えることで、江戸期のツが詰字のTであることを再発見しました。そして江戸期のツが詰字のTであるという事実を錯誤したことで、舌内入声は江戸初期までtとして存続したとみる通説がうまれたといえるでしょう。

さて、中国語中古入声はtであるとの、カールグレン以来の抜きがたい信念の是非はこのあと少し考えますが、表記を直截に発音とみることにたいして、警鐘を鳴らされた橋本氏の言葉を次にみておきます（橋本萬太郎　1981：185－6）。

「（東干語にたいする、ポリバーノフとトルゥベツコイ侯爵との言語学的に興味ある考え方の違いを述べた記述は省略）、もうひとつは、の観察というものは、かんたんに信用するもんではないな、という感慨である。（中略）（趙元任）博士が、（改行）中国語　歳[suei]/ 英語　sway[swei]（改行）の例をとって、通常の音声表記の暗示するところとは、まったく反対に、英語のほうこそ、{s]と{w]のあいだに明確なきれめがあり、中国語の{suei]は、国際音声字母でこう書くのが習慣になっているから、いかにも{s]のあとに母音の{u]がくるようにみえるが、じつは逆で、この[u]は[s]の唇音化（同時調音？）にちかいものであることを、観察し、発表しているから、（以下、略）」

3月にはいって、「戦国出土資料と上古中国語声母研究」（野原氏の博士学位論文2016）を読みました。その野原氏の論文を読むうちに、中古音、つまりは上古音の再構について思うところがでてきて書きはじめました。そこで上の橋本氏の言葉とともに別建てにして、第13章とすることにしました。

上の「4.3　書母sy-再構」の4.3.1　先行研究の紹介として、「近年の上古音研究によって中古音書母sy-は少なくとも5種の上古音声母に由来することが明らかになっている（以下、略）」（野原　2016：131）との記述がみられます（新派とよばれるBaxter氏などの再構上古音は省略）。しかしこの中古音書母sy-が上古音声母5種にさかのぼるという健気な、古典的な考えを読んで、次の記述を思いだしました（崎山　1978：117－8）。

「ダイエンの音韻対応系列が異なるごとにデムプウォルフによる再構音の変種を際限なく増やしてゆくといった方法論上の傾向は、台湾の諸言語の比較によってその極に達した観がある。（略）しかし、五ないし六の＊Sを立てる次の場合はどうであろうか。（アヤタル語など6種のsの再構の例は略）（筆者補：その後に東京方言の「お嫁さん」と大阪方言の「嫁はん」の例をあげたうえ、「さん」のsと「はん」のhを）原音として区別する必要があるだろうか（略）。」

野原氏は閩語（厦門方言）では「書」が「tsu1」（無気破擦音；野原　2016：148）、また「試」が「tshi5」（有気破擦音；同頁）で、そこに無気音と有気音の違いがみられることから、OC（上古音：ここでは戦国時代音）をそれぞれ＊s-taと＊ḷək-s（ḷは無声のlの代用記号：無声側面音＊hlに由来）と再構されています（同書：148）。しかし「書」は審母（＝書母）魚韻平声3等ʃɪo、「試」は審母志韻去声3等ʃɪei（藤堂・小林　昭和46：47,41。野原氏の中古再構音はsyoとsyiH）で、中古音は同声母（無気と有気の違いで、異韻異声調）です。もちろん中古音が同声母であれば上古音も同声母でなければならないというわけではありませんが、中古音のsy-を＊s-taと＊ḷək-sのように再構することに問題はないのでしょうか。上引の「お嫁さん」と「嫁はん」の対応から原始日本語にsとhを再構することに崎山氏は疑念をだされています。同じように上古音書母に5種もの声母を再構することに筆者は疑念がわきます。なぜなら野原氏をふくむ‘新派’とよばれる中国語学者は上古音再構のためにカールグレンのローマ字（たとえば中古音書母はsy）を前提としているからです。その前提としている中古再構音（出発点のローマ字）に間違いがあれば、その帰着点である上古再構音もまた間違ったものになるでしょう。

たとえば新派の音韻学者は上古音に牙音Kと喉音Hの2種の声母を再構したり、無声鼻音＊HNや中国語方言には全く存在しない口蓋垂音の＊qを再構しています。原始中国語とオーストロネシア語族が同源であるとみるような昔々のことであるなら、口蓋垂音の＊qの再構も考えられるかもしれません。しかし上古音（ここでは戦国時代）に口蓋垂音qを再構するならば、わずか3000年という短期間に中国全土（全方言）から口蓋垂音qが完全消滅したと考えなければなりません。このようなqの完全消滅が信じられないとすれば、上古音にqを再構することは問題があると考えるのが自然でしょう。

「上古音の研究もまた清朝の考証学者によって大いに進められ、その体系化もほぼ完成していたが、その具体的な音価などは未詳のままでありカールグレンを待たねばならなかった。」（大島　1998：385）との記述がみられます。たとえば「景」（見母梗韻3等kɪɛŋ）と「影」（影母梗韻3等ʔɪɛŋ）が諧声関係にあることから、「景」を＊k-（牙音）、「影」を＊ʔ-（喉音）と再構したことはカールグレンの偉業といえるでしょう。しかしこのカールグレンの再構（kとʔ）は清朝の考証学者がすでに知っていた「牙音と喉音はある程度自由に諧声可能」（野原　2016：97）という事実のローマ字化であり、「諧声可能」という結論をローマ字という符牒（記号）に書きかえただけのものに過ぎないといわねばならないでしょう。またこのカールグレンの枠組み（牙音kと喉音ʔ）を捨てないで、新派がカールグレンを乗り越えるために「景」と「影」を＊k-（軟口蓋音）と＊q-（口蓋垂音）、あるいは＊C.q-と＊q-（ただ一つのq；野原　2016：97）と再構するのは、カールグレンのローマ字（k/ʔ）を新たなローマ字へと書きかえた（符牒を付けかえた）だけのものといえるでしょう。

第10節で『切韻』時代の中古入声をとりあえずtʔとしておきました。そこで体系の整合性を考えて、語末子音（入声）と語頭子音（声母）を同じtʔと考えます。さらに軟口蓋音（見組）の声母と入声にも同じようにkʔ-/-kʔを考えます。そうすると「景」にkʔ（中古）→k（見母）、また「影」にkʔ（中古）→ʔ（影母）の変化を考えることができ、わずか3000年で完全消滅する口蓋垂音qを考える必要はなくなるでしょう。

ところで第9節では済州島方言の古代（中世）朝鮮語から現代語への変化をX（→pt/pc/ps）→th/ch/ʔs（Chは有気音、ʔsは濃音）と想定しておきました。そこで上の見母（k）と影母（ʔ）の通用（諧声関係）を説明できるkʔ（中古）をある不明の上古音Xからの変化（X→kʔ)と考えます。もちろん牙音と喉音の共通先祖であるそのXは軟口蓋音kの範囲で、という制約を満たす必要がありますが、そう考えればX→kʔ（中古）→ʔ（影母）、X（→kh）→x（暁母）のような変化を想定でき、「OC　＊q-/＊qh-＞MC　ʔ-（影母）/x-（暁母）」（野原　2016：76；新派の潘悟雲説）のような口蓋垂子音q/qhを再構する必要はなくなるでしょう（カイモグラフ（シュービゲル　1982：70のb→d→cの図）から軟口蓋（有気）閉鎖音の摩擦音化（kh→x）を考えることはたやすいでしょう。ただし、真の変化はX→xと直接の変化を考えなければならず、少々工夫が必要です。考察は長くなるので、今回は略）。

さらに『倭人伝』の「末盧」（「末」は中古末韻muat）の表記を考えてみます。陳寿は「松浦」の「」（matu）を入声の「末」で写しています。しかし日本語よりはるかに豊富な母音をもつ中国語を話した陳寿は「」をmuat（「末」）ではなく、なぜmuatV（Vはある不明の母音）の音をもつ漢字で写せなかったのでしょうか。考えてみれば不思議なことです。そこで当時（上古～中古）の入声をtではなく、T（ロドリゲスの詰字ツ）と想定してみます。すると、このTは江戸初期にはtとtçuと分化しているので、倭人伝時代の「松」（maT：maT→matu→matçu）を陳寿が「末」（muaT）で音訳したことに何の不思議さもみられないでしょう。

＊前回更新の「第6節　「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか」（～/japanese1hp.docx）参照）。「松浦」の「浦」が「盧」（中古模韻1等lo）で音訳された不思議さは今回省略。

ところで亀井氏は『捷解新語』の並書表記「쭈」（ccu）にたいして、次のような考えを述べられています（亀井　昭和59：362）。

「かくみれば、入声音の特殊な注音法「쭈」は、やはり、tから今日行はれる単純な「ツ」に推移するその過程に存した実際の発音の様態を写し伝えてゐるものであらう。」

そこで亀井氏の上のtを詰字のツ（T ：tとtsuは同音）と考えなおすと、その詰字ツは「쭈」（ccu：濃音ʔcu）で表記される音なので、喉頭化音のcʔuと考えることができるでしょう。

さらに詰字Tの先祖を***T***と考えれば、中国語入声と日本語の舌内入声の変化を次のように考えることができるでしょう。

中国語：***T***（上古）→T1-------→T2（中古）-----------------→ʔ（北方方言）

　　　　　　　　　 ↓　　　　 ↓（入声を借入）

日本語：　　　　　 T1（呉音）/T2（漢音）→T3（詰字＝cʔu）→Q/tsu（前節参照）

＊***T***：舌音の1種。

＊詰字T3に声門閉鎖音（喉頭化音cʔu）を考えているので、中国語入声***T***/T1/T2にも声門閉鎖音があったとみることができ、T2→ʔの変化を考えることができるでしょう。

＊倭人伝の「末」の入声韻尾も江戸時代のロドリゲスのTではなく、その先祖***T***（→T）と考えれば、先の考察は「松」（ma***T***）を「末」（mua***T***）で写したと考えることができるでしょう。

ところで清朝の考証学者の偉業には「古無輕唇」（重軽唇音の未分化など6項目；古屋　2010：16）がありますが、その事実を幫母pと非母f（中古以後、p→f）とローマ字化したのはカールグレンです。しかし入声をp/t/k、あるいは濁声母をb/d/gなどと認めたうえで、上古音に口蓋垂子音qなどを考える‘新派’の方法論はカールグレンのローマ字を焼き直し、符牒をつけかえているだけだと気づかなければなりません。

次の言葉を心にきざみ先に進みましょう（尾崎　昭和55：60）。

「（上略）いずれにせよ、何の説明も伴わない（筆者補：入声韻尾の再構で）-dとか-gとかだけなら、それはたかだか通押の關係を示す符牒というだけ、古人がとうの昔にやったことの記號化というだけのことであって、音韻科學の内部に一歩でも踏み込むものではない。（略）」

＊「古人」：民国期の黄侃を含めた清朝の考証学者。ただし、ここで（下線）は上古音再構をめざす‘新派’もカールグレンのローマ字をつけかえているだけと読みかえてもらうとよいでしょう。

さて、このあとも次の「お断り」に書くように考察は続けたのですが、今回は『切韻』時代の中古入声をtʔ（第10節）、また江戸時代の舌内入声を詰字のT（第12・13節）と考えたところで中断とします。

お断り

このあとも舌内入声の開音節化（第10節の第1項の問題）について考察を続けていましたが、今回はここで断念し、暫定版として更新することにしました。

第13節　3月おわりに急に別建てにしたものです。

第14節　「셰쭝」と「셷즈」の母音の違いを考える

＊前回の更新（～/japanese1hp.docx）の第22節「ツの破擦音化はいつ起きたのか」について、さらに考察を続けたもの。（2021.2より考察はじめる）

第15節　『朝鮮版伊路波』の와（ワ）の表記を考える（2021.2下旬より考察はじめる）

なお（前後しますが）2021.2.7の時点での考察は次のとおり。

第16節　舌内入声字のかな表記を考える

第17節　喉内入声字のかな表記を考える

第18節　上古喉音韻尾の中古音への反映を考える

第19節　梗摂と曽摂の合流について

第20節　橋本氏の喉音韻尾についての考察を考える

第21節　江韻の問題を考える

第22節　上古「侵（談）：蒸中東（陽）」の押韻について

第23節　韻序(韻目順)について考える

＊第16節以降は2020.11月ころまでに記述。第18・22・23節は以前の草稿（「上古中国語喉音韻尾の問題を解く」2013.2頃のもの）をもとに記述。今回は第16-19節（第22節も）まで書き続けていたのですが、時間がなく更新を断念しました。

1. おわりに

昨年11月すぎたころに第17節あたりで考察を一時やめて、更新しようと考えました。しかしその後も考察をつづけたために年末近くになり、このままではとても更新はできないので、注などを除いた第16・17節までを暫定版として更新するというアイディアがわきました。しかしそれでも第20節以降も考えだし、すぐに年を越してしまい、さらには2月に入って第14・15節の考えがわきました。しかしやはりこのまま考察を続けると春をこえても更新ができないと思うようになり、そこで暫定版として第12節までを校正して更新することにしました。なお第12節の次に第13節として、「ロドリゲスの詰字Tはどんな音だったのか」を書いていたのですが、校正するうちに第12節と第13節をあわせて書きなおし、第12節としました。

ところで先日までは次回の更新では第12節までの校正と今回載せなかった注など、さらに第14節以降の考察をあわせて載せる予定をしていました。しかし第14節以降の考察は促音（舌内入声）に関する問題とはいえ、撥音に関する問題でもあるので、次回の更新は撥音の問題からはじめようと考えなおしました。そこで次回の更新は今回省略した注や資料解説などの校正をして、補正版の形で更新しようと思います。また今回のような時間切れにならないように半年ほどで更新するために、撥音の問題は少しだけ考察し、補正版とあわせて更新する予定です。

今回は本当にグダグダになってしまい、促音（入声）についての考察は中途半端になってしまいました。更新が非常に遅れたことおわびします。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021.4.7

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

【注】（今回は未校正のため、すべて割愛）

【以前の考察】（前回更新分を載せてあります）

＊各節・各注などに関係する、以前のHP は次の通り。過去のホームページのURLの初めのhttp://ichhan.sakura.ne.jp/は省略してあります。

第3・27節：上代特殊仮名遣いについての考え

A.「 7.三たびハ行頭子音の変化について（問題1）（paline/paline4.html）

B.「3.動詞活用の問題を未解決にした大野説」/「4.エ列甲乙類音はどんな音だったのか」（ともに「母音融合にたいする大野説を考える」（special/oono.html）のなかで）

第4～11節：

A．中期朝鮮語の終声（入声）について：

「第6節　終声字を考える」（korean/korean1hp.docx）

B．中国語と朝鮮漢字音の入声について：

「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

C．中国語の入声について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第6節：倭人伝の表記について：

「1.日本書紀歌謡次清音字の問題」（kaline/kaline1.html）

第7・8・11節：中国語の方言分化と呉音・漢音の関係について：

「中国語はいつから方言に分かれたのか」（cht/oninronhp.docx）

第10節：

A.「第8節　各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える」（korean1hp.docx）

B.「『捷解新語』における初声を重ねる注音法」（kaline/kaline2.html）

C.「17.促音便ってなに？」（rendaku/rendaku11.html）

第12～14 節：母音の無声化について：

「4.母音の無声化」（rendaku/rendaku20.html）

第15 節：破擦音化について：

「7.タ行の破擦化について」（rendaku/rendaku3.html）

第16 節：舌尖母音・中舌母音について：

A.「6.中舌母音を考える」/「7.宮古方言の中舌母音を考える」（special/oono.html）

B.「5.口蓋化と摩擦噪音について」（kaline/kaline1.html）

第18節：「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第26節：四ツ仮名について：

A.「9.四ツ仮名について」（rendaku/rendaku4.html）

B.「四つ仮名の混乱」（rendaku/rendaku21.html）

注2：日本語とハワイ語における英語からの借入語の関係について：

「17．促音便ってなに？」のなかの「母音添加」（rendaku/rendaku11.html#boin-tenka）

注8：古代助詞イ、またイ・シの相関について：

「F.日本語とオーストロネシア語族にみられるイ・シの相関について」（paline/paline12.html）

注28：「6.謡曲におけるツの発音について」（korean/korean3hp.docxの第6節）

注30：喉頭化（母）音について：

A.「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2)」（paline/paline6.html）

B.「10.古代日本語のどんなところに喉頭化母音がみられたのか(問題2）」（paline/paline7.html）

C. 「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

D.「4.琉球方言にみられる無気喉頭化音について」（kaline/kaline2.html）

注29～31：声門閉鎖音と促音の関係について：

A.「(41) （声門閉鎖音）→Q（促音）の変化について(新しい考え　2011.12.5)」（paline/paline14.html#41）

B.「ʔ→Qの変化にたいする批判」（korean/korean2hp.docxの注10）

注32：中古舌内入声をtʔと考えるとしても、なお残る疑問について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）の注23

注59：「はっきりした声立て」と「ゆるやかな声立て」について：

A.「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

B.「5.初声喉音字を考える」（korean/korean1hp.docx）

注62：「まる1する2」の「る1」の消失と喉頭化音の発生について：

「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2）」（paline/paline6.html）

注66・70：サ行音の変化について：

A.「6.サ行の直音化について」/「8.ツァ行音について」（rendaku/rendaku3.html）

B.「10.すずめはスズと鳴いたか？」（rendaku/rendaku5.html）

C.「サ行イ音便の消長」（rendaku/rendaku11.html）

D.「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

E.「須須」と鳴いた雀はいま」（saline/saline1.html）のなかの「5．稲荷山鉄剣銘のサ音を考える」

F.「5.サ行音の問題を考える」（special/oono.html）

注78：「ウ（イ）音便と促音便・撥音便の交替」：

A.「17.促音便ってなに？（rendaku/rendaku11.html）

B.「18.特殊ウ音便と撥音便・促音便の交替はなぜ起こったのか」（rendaku/rendaku12.html）

C.「5.促音化現象について考える」（kaline/kaline2.html）

【引用書など】

＊中国・韓国人名は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略。

愛知大学中日大辞典編纂処編　1968　『中日大辞典』　中日大辞典刊行会（発行）　燎原（発売）

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂出版

飯田利行　1990　『日本に残存せる中国近世音の研究』　名著出版

＊『日本に殘存せる中國近世音の研究』（駒澤大學中國文學研究室内飯田博士著書刊行會（発行）　昭和30年）の復刻版

岩倉市郎　昭和16　『喜界島方言集』（全国方言集一）　柳田國男編　中央公論社

岩淵悦太郎　昭和52　『国語史論集』　筑摩書房

岩生・佐久間訳注　1965　『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス著　佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注/岡田章雄訳注　岩波書店

上野和昭編　平成28　『補忘記貞享版元禄版影印ならびに声点付漢字索引　影印篇』（アクセント史資料索引　第二十一号（一））　アクセント史資料研究会（発行）

幸雄　昭57　「解題」『宮良當壯全集　9』　宮良當壯著　第一書房

大島正二　1998（増訂版）　『中国言語学史　増訂版』　汲古書院

大塚高信訳　昭和9　『コイヤード　日本語文典』　Diadaco Collado著　坂口書店（発行）

＊『Ars Grammaticae Iaponicae Lingvae』（ローマ刊　1632年）

大山公淳　昭和53　『大山公淳著作集　第四巻』　大山博士著作集刊行会編　（株）ピタカ

小川環樹　昭和52　『中国語學研究』（東洋学叢書）　創文社

＊尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋學叢書）　創文社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集3　日本語のすがたとこころ（一）音韻』　吉川弘文館

顔森編纂　2005　『廣集韵譜』　江西人民出版社

慶谷壽信　1997　「歌戈魚虞模古読論争の学史上の意義」『橋本萬太郎紀念中国語学論集』　余靄芹（Anne O.Yue）・遠藤光暁編著　内山書店

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史　訓民正音はどう創られたか』　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店

京大国語国文研編　昭和36　『全　浙兵制考日本風土記』（本文、解題、國語・漢字索引）　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

京大國語國文研編　昭和47　『三本對照　捷解新語　本文篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

河野六郎　1968　『朝鮮漢字音の研究』　私刊

小林芳規　昭和44.12　「中世」『國文學　解釋と鑑賞』（第34巻14号）　至文堂

小松英雄　1956.7　「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程―中世博士家訓点資料からの跡付け」『国語学』（第25緝）　国語学会編　国語学会

小松英雄　昭和56　『日本語の世界　7　日本語の音韻』　中央公論社

崎山理　1978　「3　南方諸語との系統的関係」『岩波講座　日本語12　日本語の系統と歴史』　岩波書店

佐藤昭　2002　『中国語語音史―中古音から現代音まで』　白帝社

柴田武　1988　『方言論』　平凡社

志村良治　昭和42　「5　中古漢語の語法と語彙」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

M.シュービゲル　1982（新版初版）　『新版　音声学』　小泉保訳　大修館書店　＊初版は1973

佰太郎　1977　「4　現代日本語の音韻」『岩波講座　日本語5　音韻』　岩波書店

白木進編著　昭和51　『かたこと』（笠間選書53）　笠間書院

　＊『かたこと』（安原貞室著1650年刊）の注釈書

城田俊　1995　『日本語の―音声学と音韻論―』（テキスト版）　ひつじ書房

杉本達夫・牧田英二・古屋昭弘共編　2013　『デイリーコンサイス中日・日中辞典（第3版）』　三省堂

＊デイリーコンサイス中日辞典とデイリーコンサイス日中辞典の合冊

大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成7（再版）　『中国語大辞典　第二冊』（中日辞典の部）　角川書店

高山倫明　2012　『日本語音韻史の研究』（ひつじ研究叢書〈言語編〉第97巻）　ひつじ書房

趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫800）　平凡社

陳彭年等（重修者）　民国80　『校正宋本廣韻附索引』　藝文印書館（校正・印刷）

寺師忠夫　1985　『奄美方言、その音韻と文法』　根元書房

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55（改定版）　『現代朝鮮語辞典　改定版』　養徳社

土井補注　1965　『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス著　岩生・佐久間訳注　岩波書店

土井忠生訳註　昭和30　『日本大文典』　ジョアン・ロドリゲス著　三省堂出版

　＊『Arte da lingoa de Japam』（P.João Rodriguez著 長崎学林刊 1604-8年）

土井忠生・森田武・実編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　岩波書店

東京大學國語研究室編　昭和63　『下學集　三種』（東京大學　國語研究室　資料叢書　第十四巻』　汲古書院

　＊天文23年版・永禄2年版・黒川本の影印

道忠編　明治42（初版）　『禅林象器箋』　無著道忠編　村田無道校字　貝葉書院　＊復刻版（誠信書房1963）

＊国会図書館デジタルコレクションinfo:ndljp/pid/823268（初版）より

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館

　＊江南書院1979年の改版本

外山映二　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中田祝夫・小林祥次郎　昭和48　『書言字考節用集研究並びに索引』　風間書房

＊影印篇 (原本: 享保二年版 国立国会図書館岡田文庫蔵　題簽の書名: 増補合類大節用集)

中田祝夫・根上剛士　昭和46　『中世古辞書四種研究並びに総合索引　影印編』　風間書房　昭和46

中本正智　1976　『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

日本大辞典刊行会編　昭和48/49　『日本国語大辞典』（第6・9巻）　小学館

沼本克明　1974.12　「日本漢字音に於ける唇内入声字の促音化とフ入声」『国語学』（第99緝）　国語学会編　国語学会

沼本克明　2005　「第8章　漢字音と日本語　b.漢音系字音」『朝倉日本語講座2　文字・書記』　林史典編　北原保雄監修　朝倉書店

野原将揮　2016　「戦国出土資料と上古中国語声母研究」（博士学位論文：早大学位記番号新7304）

＊早稲田大学リポジトリ（http://hdl.handle.net/2065/00051853）

橋本萬太郎　1981　『現代博言学』　大修館書店

服部四郎　1951（旧版）『音声學』（岩波全書）　岩波書店

　＊1984年（新版：録音カセットテープ附属：未見）

濱田敦 1950a　「促音と撥音（上）」『人文研究』（大阪市立大学紀要（1巻1号）　大阪市立大学

濱田敦　昭和58　『續朝鮮資料による日本語研究』　臨川書店

浜田敦・佐竹昭広編　昭和46（昭和43初判）　『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔　全一冊』　臨川書店

平山久雄　昭和42　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂

藤原浩史　昭和63　「付録1　唐音一覧（呉音・漢音対照）」『漢字講座6　中世の漢字とことば』　佐藤喜代治編　明治書院

古屋昭弘　2010.11　「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』（257号抜刷）　日本中国語学会

三浦　昭和50　『音曲玉淵集』　濱田敦編並開題者　臨川書店

＊『音曲玉淵集』（三浦著　享保12年板本）の影印。

三木幸信・福永静哉　昭和41　『国語学史』　　風間書房

宮島達夫　昭和36.6　「母音の無声化はいつからあったか」『国語学』（第45輯）　国語学会

森田武　昭和51　『天草版平家物語難語句解の研究』　清文堂出版

諸橋轍次　平成8（修訂第2版4刷）　『大漢和辞典　巻九』　大修館書店

山田孝雄　昭和29　『平家物語の語法』（上・下）　寶文館

山田孝雄　昭和33（訂正版）　『國語の中に於ける漢語の研究』　宝文館出版

吉澤義則　昭和6　『国語説鈴』　立命館出版部

羅聖淑　2008（第2版初版）　『韓国語　発音と文法－第2版－』　白帝社

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　村山七郎監修　大修館書店